

福岡市

いるべ  
入部 I

県営圃場整備事業に伴う発掘調査の概要

重留遺跡第1・2次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第235集

1990

福岡市教育委員会

IRU BE  
入 部 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第235集



遺跡略号 SHE-1,SGT-2  
遺跡調査番号 8748, 8801

1990

福岡市教育委員会



羽塚古墳全景

## 序 文

福岡市の西南部に位置する早良平野は、早良川とその支流によって肥沃な田園地帯を形成しておりましたが、近年の著しい開発と、福岡市街の発展に伴い、かっての風景を失いつつあります。こうした開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査も急増し、貴重な遺跡の発見が相次いでいるところです。

本書で報告する重畠遺跡の発掘調査は、入部地区の圃場整備事業に伴うものです。この圃場整備事業は昭和62年度より8ヶ年計画で実施されており、その規模は約75haに及ぶものです。

発掘調査は昭和62年度に第1次調査、昭和63年度に第2次調査を実施し、縄文時代から中世に亘る遺跡や遺物を検出し、多人な成果をあげることができました。特に縄文時代の住居跡や、坪塚古墳、弥生時代前期集落、古墳時代の方形周溝墓群はこの地域の歴史や北部九州の古代史を知る有力な手掛りとなっております。

本書は、上記の成果についての概略を収録するもので、埋蔵文化財への理解と認識を深めるためにご活用いただければ幸いです。

最後に、調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに心から謝意を表する次第です。

平成2年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

## 例　　言

1. 本書は、福岡市早良区大字重留に所在する重留遺跡群の発掘調査に関する概報である。
2. 本調査は福岡県営入部地区圃場整備事業に伴い、福岡市教育委員会が第1次調査を昭和63年1月6日より3月31日、第2次調査を昭和63年6月21日より平成元年4月17日まで発掘調査を実施した。
3. 本書の書名には事業名である「入部」を用いた。これは「福岡市文化財分布地図－西部I－」によれば、入部地区圃場整備事業予定地内には多くの遺跡が所在しており、特定の遺跡名を書名に用いた場合の混乱を避けるための措置である。
4. 昭和62・63年度の事業地には共に重留遺跡群が分布しており、昭和62年度調査を重留遺跡第1次調査、昭和63年度調査を重留遺跡第2次調査としたい。
5. 出土遺物・調査記録類は将来、整理報告が済み次第、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
6. 本書で用いた遺物・遺構実測図は、第1次調査を田中克子、第2次調査を松尾秋代、吉田扶希子、井沢洋一が製図した。
7. 本書で用いた遺構写真は気球写真を除いて、第1次調査を力武卓治、常松幹雄、第2次調査は井沢洋一、菅波正人が撮影した。
8. 本書の執筆は第1次調査を力武卓治、常松幹雄があたり、第2次調査を井沢洋一、菅波正人が担当した。
9. 本書の編集は井沢、常松、菅波の協議によった。

## 本文 目 次

第 1 章 はじめに .....	1
1. 発掘調査に至る経過 .....	1
2. 発掘調査の組織 .....	3
第 2 章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	4
第 3 章 第 1 次調査の概要 .....	7
第 4 章 第 2 次調査の概要 .....	17

## 挿 図 目 次

Fig. 1 入部地区園場整備事業の年次計画図（縮尺1/12,500） .....	5
Fig. 2 重留遺跡群と早良平野の主な遺跡（縮尺1/75,000） .....	6
Fig. 3 周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図－西部I－）（縮尺1/16,000） .....	折込
Fig. 4 第 1 次調査の調査区位置図（縮尺1/2,000） .....	9
Fig. 5 S C01住居跡出土遺物実測図（縮尺1/4） .....	11
Fig. 6 貯蔵穴出土の遺物（縮尺1/3） .....	12
Fig. 7 埋甕の出土状態と実測図（縮尺1/3） .....	13
Fig. 8 埋体の出土状態と実測図（縮尺1/4） .....	13
Fig. 9 出土した二又歛と実測図（縮尺1/8） .....	16
Fig. 10 第 2 次調査試掘調査位置図（縮尺1/5,000） .....	19
Fig. 11 第 2 次調査の調査区位置図（縮尺1/5,000） .....	20
Fig. 12 S D02溝土層図（縮尺1/30） .....	24
Fig. 13 第 1 地点遺構配置図（縮尺1/400） .....	24
Fig. 14 第 2 地点遺構配置図（縮尺1/700） .....	26
Fig. 15 押塚古墳復元模式図 .....	27
Fig. 16 周溝 6 トレンチ上層図（縮尺1/50） .....	28
Fig. 17 重留 2 号墳実測図（縮尺1/400） .....	31
Fig. 18 第 7 - I - II 地点遺構配置図（縮尺1/200） .....	34
Fig. 19 S D04溝土層図（縮尺1/30） .....	35

Fig.20	S D 11河川跡しがらみNo.1 失測図（縮尺1/30）	36
Fig.21	第8—I・II地点遺構配置図（縮尺1/400）	37
Fig.22	S D 201溝土層図（縮尺1/30）	39
Fig.23	第8—III地点第1・2面遺構配置図（縮尺1/400）	41
Fig.24	第8—IV地点第2面遺構配置図（縮尺1/400）	42
Fig.25	S C 05住居跡失測図（縮尺1/100）	45
Fig.26	第9—III地点遺構配置図（縮尺1/400）	45
Fig.27	第10—I・II・III地点第1面遺構配置図（縮尺1/400）	47
Fig.28	S D 02溝土層図（縮尺1/40）	48
Fig.29	S E 04井戸失測図（縮尺1/40）	49
Fig.30	第10—IV地点第1面遺構配置図（縮尺1/400）	51
Fig.31	第10—IV地点第2面遺構配置図（縮尺1/400）	52
Fig.32	S K 17土壤(井戸)土層図（縮尺1/30）	53
Fig.33	S C 03縄文時代住居跡失測図（縮尺1/80）	53
Fig.34	第11地点遺構配置図（縮尺1/200）	54
Fig.35	第16地点遺構配置図（縮尺1/500）	57
Fig.36	S X 1017方形周溝墓主体部失測図（縮尺1/40）	59
Fig.37	第17地点遺構配置図（縮尺1/400）	60
Fig.38	第18地点遺構配置図（縮尺1/400）	61
Fig.39	第19地点遺構配置図（縮尺1/200）	62
Fig.40	第20地点遺構配置図（縮尺1/250）	63

## 表 目 次

Tab. 1	調査概要の一覧	21
Tab. 2	第2次調査地点一覧表	21・22
Tab. 3	第2次調査地点別遺構・遺物一覧表	22・23

## 付 図 目 次

付図1 重畠遺跡第1・2次調査各調査区の配溝図（縮尺1/2,000）

# 第1章 はじめに

## 1. 発掘調査に至る経過

入部地区の圃場整備事業計画は当初、約100haの耕地を対象に示された。昭和60年度のことである。当該区には、埋蔵文化財の分布調査等によって12の遺跡群と古墳1基が設定されていた。これをうけた埋蔵文化財課（当時文化課）では、農作物の休耕を待って、昭和61年3月17日から26日にかけて試掘調査を実施した。その際の試掘は、室見川以北の6遺跡群と1古墳の計9箇所行われた。試掘の結果、6地点で柱穴や溝を確認し、さらに坪塚古墳の周濠部では葺石も確認されている。採集遺物などから、ほぼ全城に亘って、弥生時代や中世を主体とする時期の遺構が、かなりの密度で分布する可能性が強まった。

農業土木側の計画によると、事業計画は昭和62年度から8ヶ年に及ぶもので、初年度5ha、次年度が10ha、以後5ヶ年が15haで、最終年度が10haというものであった。

昭和62年度の調査は、工事範囲の協議が整った昭和63年1月になって着手することができた。そのため事前の試掘調査を行う猶予がなく、各構造物や田面に沿って遺構確認を行った。そして検出された遺構が盛土等による保存のできない場合は、そのまま本調査に移行するという方法を探った。

昭和63年度の事業計画は当初計画よりも規模が大きく16.2haの広範な地域に及んだ。そのため調査体制、調査期間、予算等の都合から調査対象地を最小限に絞り込む必要があった。試掘調査を5月～6月の間に実施し、その結果をもって県・市の農政担当者と協議を行い、設計変更や施工方法の変更によって調査対象面積の縮小を図ることとした。昭和63年度は以下の合意事項に基づき発掘調査を実施したが、施工業者に合意事項の不徹底な部分もあったため一部の遺跡が破壊され、調査対象面積が増加した。

### 協議事項

- ① 道路、水路等の永久的な構造物は全て100%の本調査対象とする。
- ② 切り土施工の田面については本調査の対象とするが、設計変更によって盛土施工が可能な場合は本調査の対象としない。
- ③ 盛土施工の田面は原則的には本調査の対象としない。但し、耕作土の直ぐ下に遺構が存在し、併



試掘調査

せて計画上の盛土の厚さが薄く、施工の際に遺構を傷める可能性が高い場合は本調査の対象として協議を行う。

④ 切り土及び盛土施工を行わない田面、すなわち施工時に耕作土を除去しない田面については本調査は不要であるが、施工時に於いては整地作業のみにとどめる。

\* ③・④の施工方法については以下のごとく施工細則を決めている。

A. 整地のみ（表土を扱わない場合）。ブルドーザー整地。

B. 盛土厚さ5~9cmの場合。バックホーにより埋戻し（荒整地）。ブルドーザー整地。

C. 盛土厚さ20cm以上の場合。バックホー埋戻し、ブルドーザー整地。

D. 盛土厚さ30cm以上の場合。ブルドーザー埋戻し、整地。

但し、上記の協議事項について幾つかの問題を含んでいる。盛土施工方法に関して、必ずしも現場に於いて上記の点で順守されることは少ない。特に下受け業者が受負っている場合にバックホーの埋戻しを実施している状況は今まで現認できていない。ブルドーザーによる盛土整地が主体をなしている。又、遺構面が耕作土の直ぐ下に検出できる場合も同様に耕作土の除去の際に破損を受けることが多々あるため、施工業者への協議事項の徹底を計ることが求められる。

Tab. I 調査概要の一覧

次 数	年 度	事 業 量	調査対象面積	調 查 面 積	調 査 期 間
1 次	62年	5.0ha	12,500m <sup>2</sup>	15,000m <sup>2</sup>	1988年1月6日~88年3月31日
2 次	63年	16.2ha	162,000m <sup>2</sup>	39,500m <sup>2</sup>	1988年6月21日~89年4月17日

次数	遺跡調査番号	遺 跡 略 号	調 査 地 地 緯	分布地図番号
1次	8748	S H E - 1	早良区大字重留字石塚	重留84
2次	8801	S G T - 2	早良区大字重留字坂本・宇松本・字町田	重留84・85

## 2. 発掘調査の組織

昭和62年度

県営入部圃場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備鉱害課 福岡市経済農林水産局農業土木課  
福岡市入部土地改良組合

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

課長 柳田純孝 第二係長 飛高憲雄

調査担当 第二係 力武卓治 常松幹雄 岸田 隆(庶務)

昭和63年度

県営入部圃場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備鉱害課 福岡市経済農林水産局農業土木課  
福岡市入部土地改良組合

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

課長 柳田純孝 第二係長 飛高憲雄

調査担当 第二係 井沢洋一 常松幹雄 野村俊之

第一係 菅波正人 岸田 隆(庶務)

発掘調査協力者 有田吉太 植木宏治 内田修一 大岡弘明 小川泰樹 大嶋佳之 尾崎利一 坂口良正 重藤輝行 高田茂 田中宣義 豊田大輔 四鴎秀城 広瀬桂 平田勇夫 橋口宏樹 真名子時雄 森邦彦 山口一郎 青柳寿子 青柳美智子 青柳律子 安部晴代 有馬千恵美 石橋美紀子 出田澄子 伊藤みどり 井上愛子 井上清子 井上さえ子 井上トミ子 井上善智子 井上ムツ子 今福庸美 今村加代子 因ヨシ子 牛尾秋子 牛尾二三子 大内文恵 大崎タカ 大鶴多喜子 大野清子 尾崎久美子 尾崎佳枝 金子ヨシ子 川口シゲノ 斎地栄子 清末シズエ 倉光アヤ子 倉光京子 倉光千鶴子 黒木和子 小柳和子 繁スミ子 板本ハツ子 佐藤みすは 渡谷友代 正崎泰代 杉本八重野 悅慶とみ子 高木正代 高田玉彦 高地秀代 岩美保子 多田咲子 武末朝枝 谷吉美 陳雅智 津川真千代 辻節子 徳永ますみ 富崎栄子 富崎文子 仲尾弘子 中島道子 中村まゆみ 中村真由美 永井鈴子 鍋山千鶴子 西嶋彰子 西嶋タツノ 西嶋マツ子 西嶋洋子 稲田香代子 土生喜代子 土生よし子 原ハナエ 波呂ヨシ子 橋口久子 平川基美子 平川史子 平田タマエ 平田千鶴子 平野綺子 平野ミサヲ 福田小菊 藤井キミエ 古川千賀子 堀尾久美子 松尾秋代 松尾真澄 松永一枝 三谷朗子 本石美香 森山早苗 家迫千代 柳浦八重子 山口タツエ 山下アヤ子 山田トキエ 山田ヤス子 山西人美 結城千代子 横溝恵美子 横溝加代子 吉岡タミエ 吉岡光子 吉岡直美 吉住シズエ 吉田扶希子 若谷敏恵 間坂チカ 間山喜代子



Fig.1 入部地区圃場整備事業の年次計画図 (縮尺 1/12,500)

## 第2章 位置と歴史的環境

遺跡の位置する早良平野は西側を飯盛一長垂山山塊、東側を油山山塊、南側を背振山脈で区切られた、完結性のある小平野を為している。平野の中央には背振山脈に源を発する室見川が北流し、博多湾に注いでいる。平野内には幾つかの洪積台地も点在するが、その大部分は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成されている。今回報告する第1次、2次調査が行われた地区は重留遺跡群にある。この遺跡群は早良平野の中央東寄りの室見川と金屑川にはさまれた冲積高地に展開する。標高は約25~28mで、現状は水田である。重留遺跡群は「福岡市文化財分布地図一西部I-1」では南北1kmに亘る範囲が記されていて、行政的には福岡市早良区大字重留に位置する。第1次、2次調査は遺跡群の北端から中ほどにかけて行われた。

ここで周辺の遺跡について見ていく。室見川中流域には幾つもの沖積高地が存在し、それらに遺跡は形成される。四箇遺跡群は縄文時代~古墳時代に亘る遺構、遺物が検出されている。<sup>1</sup>特に縄文時代後期の三ヶ月形をした特殊泥炭層からは多数の土器・石器の他にヒョータン、マメなどの栽培植物が検出されている。田村遺跡群は縄文時代後・晚期、弥生時代前期、平安~鎌倉時代を中心とした多数の遺構、遺物が検出されている。特に10地点の調査では板付I式併行期の斐棺墓が検出されている。同期の斐棺墓は重留遺跡第2次調査でも検出しており、この地域における斐棺墓出現を考える上で貴重な資料と言える。室見川左岸の吉武遺跡群は旧石器から近世に亘る遺跡で、園場整備や道路建設にかかる調査で莫大な遺構、遺物が検出されている。特に「早良正墓」とさわがれた吉武高木、墳丘墓が検出された吉武極渡遺跡など弥生時代の墳墓には目を見張るものがある。<sup>2</sup>また、古墳時代においても、帆立貝式前方後円墳の極渡古墳や大型建物跡が検出されており、早良平野における拠点的集落の一つといえる。一方、山麓部に目をやると、油山山麓には多くの群集墳が存在する。東側にある重留古墳群でも現在27基もの古墳が確認されている。また、ここでは小田編年II期段階の須恵器窯跡を検出されている。<sup>3</sup>北側に下った飯倉遺跡群では最近の調査で5世紀後半~6世紀中葉の前方後円墳である梅林古墳が発見されている。この古墳は早良平野における、坪塚古墳、極渡古墳に続く時期の首長墓であり、それらとの関連が注目される。

註1 福岡市教育委員会 「福岡市文化財分布地図一西部I-1」1976年

2 福岡市教育委員会 「丘陵遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集」1987年

3 福岡市教育委員会 「田村遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集」1989年

4 福岡市教育委員会 「吉武高木」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集」1986年

5 福岡市教育委員会 「重留遺跡」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集」1988年

6 市官住宅建設に伴って、平成元年5月~8月に調査した。現在、保存整備の計画中。

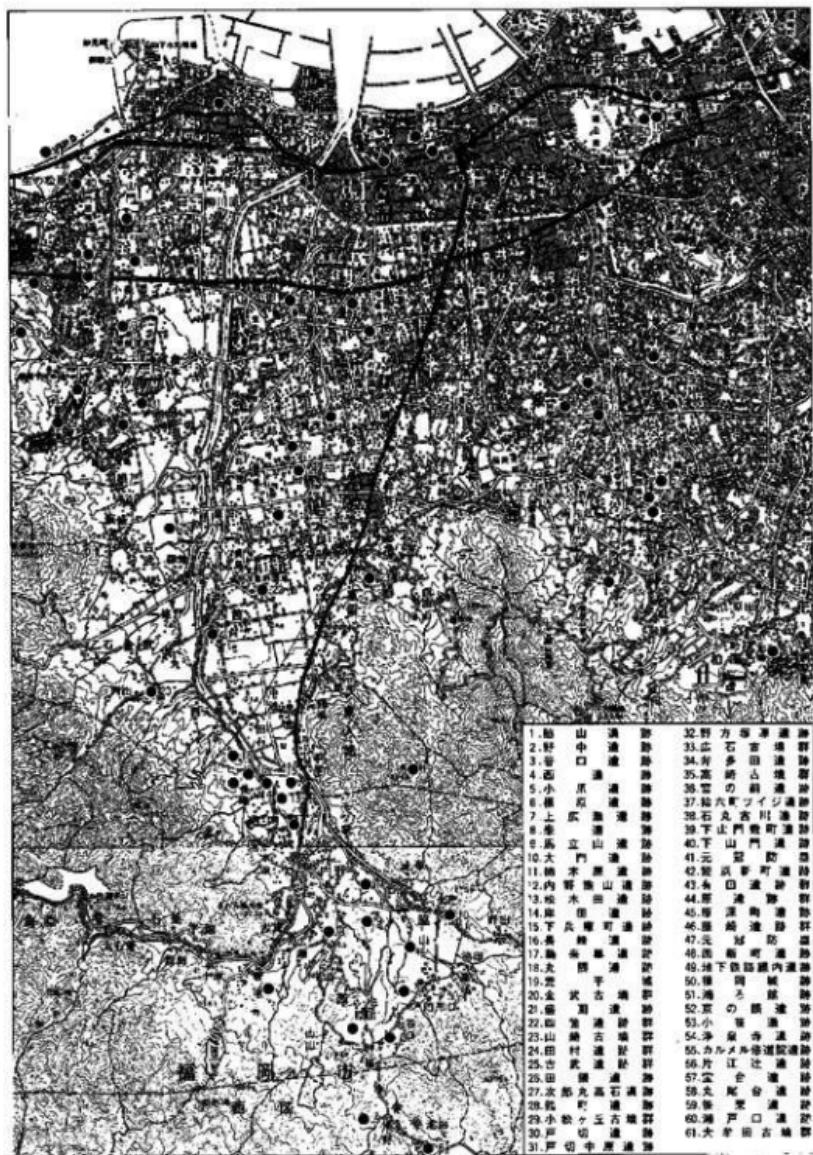


Fig.2 垂留遺跡群と早良平野の主な遺跡 (縮尺 1/25,000)

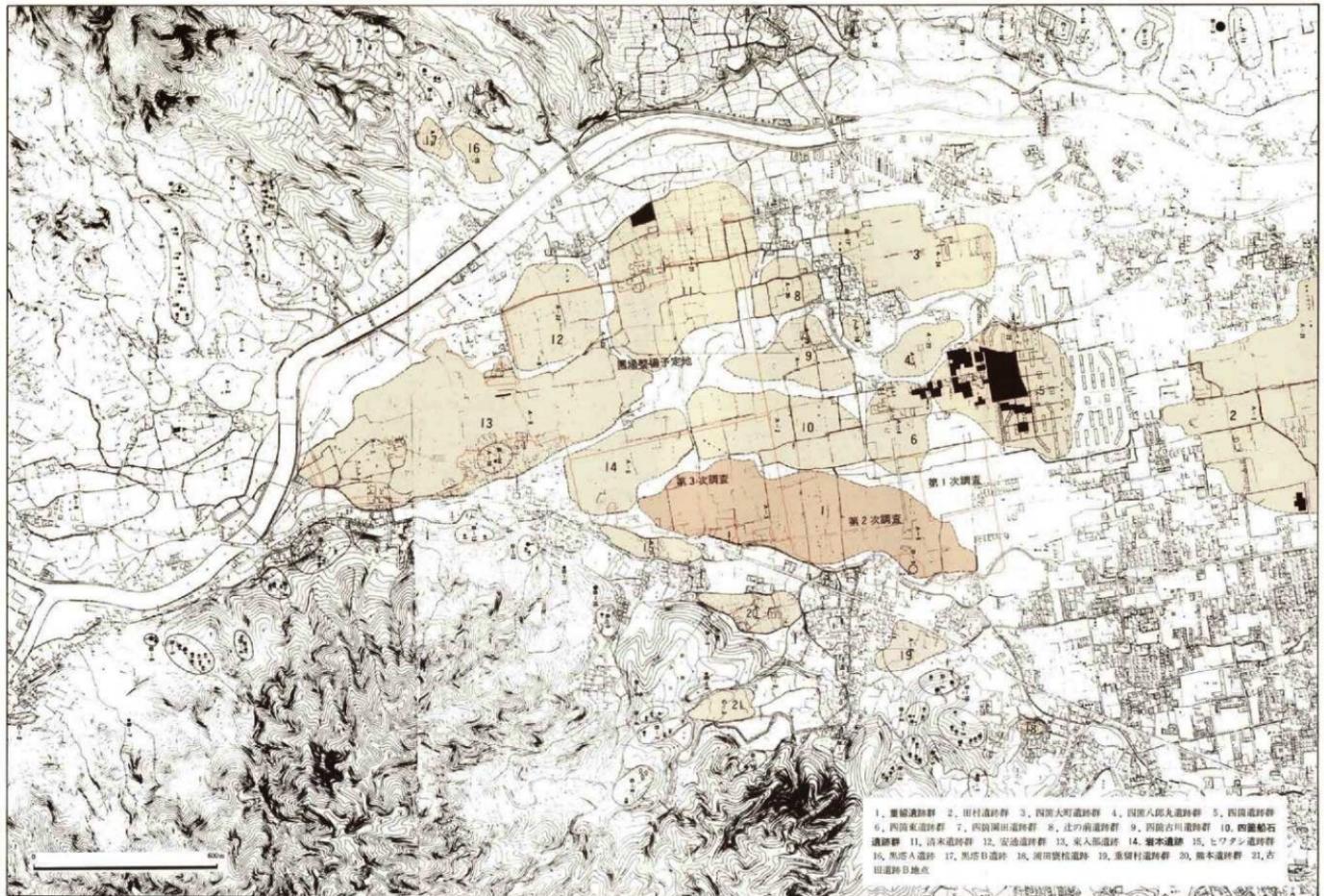


Fig.3 周辺遺跡分布図（福岡市文化財分布地図 西部Ⅰ）（縮尺 1/16000）

### 第3章 第1次調査の概要



縄文時代の竪穴住居（SC01）の発掘作業

## 第1次調査の概要

### 調査経過

昭和62年度の調査は、工事範囲の協議が整った63年1月になって漸く着手することができた。

約5haの工事区域は、3月を目指して造成工事が進められることになった。この中、調査対象区は道路・水路などの構造物が計画されている箇所と、田面の出来高によって影響を受ける部分についてである。田面が削平される場合は勿論だが、出来高が従来の田面と同レベルあるいは弱干の盛土であっても、表土直下で遺構が確認される場合は基盤土を整地する段階で遺構が破壊され、発掘調査が必要となる。

調査期間が非常に限られているため、十分な試掘を行なう余裕がなかった。そこで構造物部分については遺構面まで掘り下げて逐次、有無を確認して、遺構が認められた箇所は即本調査を行なうという方法を実施した。また構造物以外の部分については、現状の田面ごとに遺構確認を行ない、造成で影響を受ける部分は、その都度、面を拡張して調査を行なうことになった。

調査区は、工事区域に東西にはしる1号・2号の取付排水路を境に北側をA区、南側をB区とし、南北に設置された既設の支線道路と14号支線道路で画して、西から1区、2区、3区と呼称した。また東端に南北にはしる15号支線道路をC区とし、合計7区画を設定した。

約3ヶ月間の調査によって検出された遺構



綱文集落の調査



掘り下げがすすむ古代の河川



好天にめぐまれた遺跡説明会

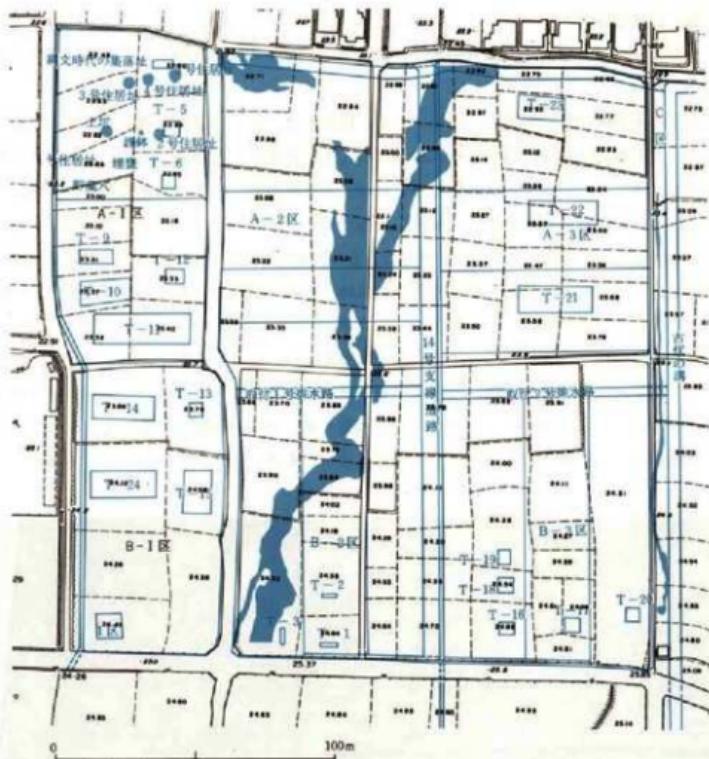


Fig.4 第1次調査の調査区位置図 (縮尺 1/2,000)

は、縄文時代晚期の集落址と、縄文晚期以降の河川と井堰などである。分布地図のうえで縄文時代の遺構は四箇東遺跡を拡張した範囲に収まり、C区の古墳時代以後の溝は重留遺跡に含まれている。ところで、その両遺跡に挟まれた部分にあたる河川を遺跡名としてどう捉えるかという問題があり、1987年度の年報では事業名から入部遺跡第1次と表わしている。

3月末までの調査は、必要最小限の記録をとるに止まった。しかしその間、3月中旬には、遺跡説明会を催し、500名近い県内外の皆さんに調査の一端を見てもらうことができた。また縄文晚期の炉の一部は、木棒にはめ込んで取り上げを行なった。

### 縄文時代の集落址

A-1 区では、耕作土を除去した面で、特に縄文土器が多く採集されることから、遺構の発見が期待されていた。

この地区の基盤土は、暗灰褐色の細かい土と、粗砂が入り混じった肩状地によく見られるものである。この粗砂は部分に径4m程の範囲で縄文土器の集中した箇所があり、作業を進めた結果住居址であることが明らかになった。これが1号住居址で、3.8×3.6mの規模で不整円形のプランであった。その中央で焼土が堆積した部分は、口縁部と底部を打ち欠いた胴部径が30cm程の深鉢を埋め込んだ構造であることが判った。また炉を囲む位置で5つの柱穴が確認された。出土遺物の主なものには、精製・粗製の浅鉢や深鉢、土製の紡錘車、石皿、石斧、石刀、石匙などがある。時期は縄文晩期の古段階に比定される。

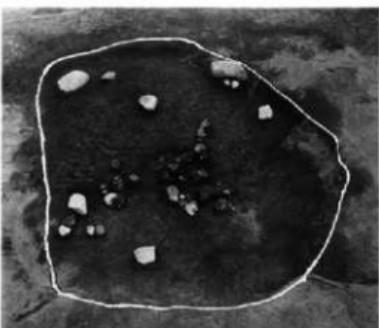
縄文時代の遺構は、工事区域の北西約3000m<sup>2</sup>に分布していることが明らかとなった。主な遺構として、縄文晩期の住居跡5棟、貯蔵穴1基、斐棺墓1基、土塙1基があげられる。住居址の中、さきに紹介した1棟を除く4棟は、遺存状態が悪く炉址が確認できるにすぎない。縄文晩期の遺構群は、当該期の土器散布地を取り巻くように配置しており、当時のムラの様子を示すと思われる。



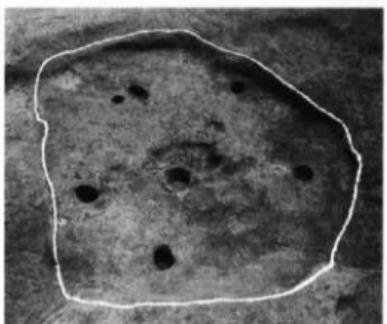
縄文時代の集落址全景（東上空から）



1号住居と遺物の出土状況



掘り下げを行なった住居跡



柱穴と中央で検出されたが址



住居跡に集う人々

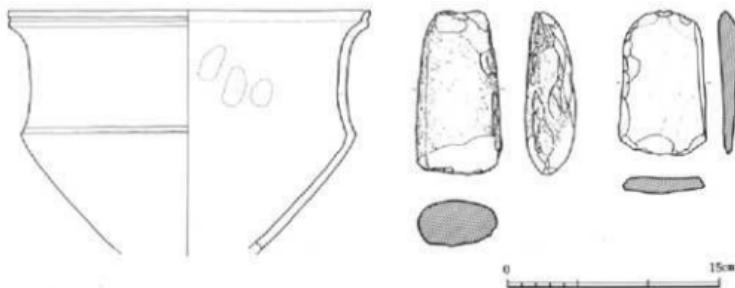


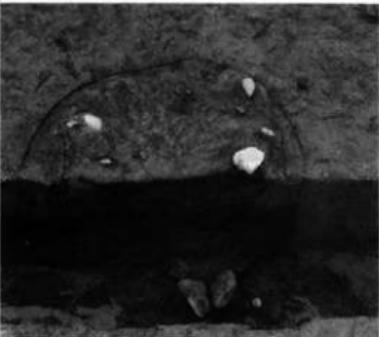
Fig.5 SC01住居跡出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

### 貯蔵穴

さきの1号住居跡の東側に南北方向の幅50cm、長さ20mの試掘溝を設定した。このトレンチの一部に炭や土器、石器が集中して出土する箇所があり、土層断面の観察から径1.5mで深さ1m程が残る円形プランの土壠と推定された。出土遺物には紡錘車状土製品や石斧、粗製深鉢の破片などがある。また、埋土の中程に炭化物の層があり、底に子供の頭大の石数個が見られる。木の実などは出土していないが、貯蔵穴の可能性がある土壠である。



完掘後の貯蔵穴（北西から）



貯蔵穴とその断面の様子（西から）

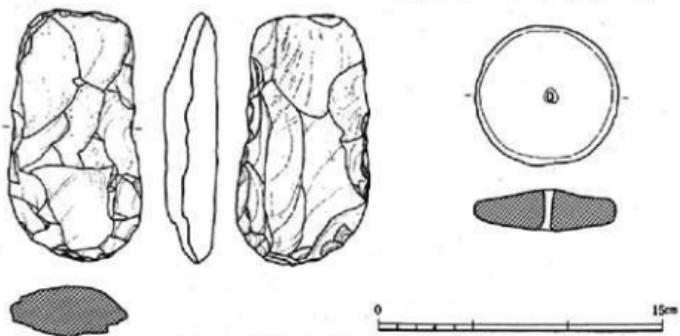


Fig. 6 貯蔵穴出土の遺物 (縮尺 1/3)

### 埋甕・埋鉢

1号住宅跡や貯蔵穴のすぐ東側で、埋甕が発見された。

埋甕には粗製の深鉢が用いられており、長径90cm、短径60cmの楕円形の土壠に底部を北に向けて埋置されていた。旧米の耕作によって鉢の上半は失なわれていたため、上部構造は不明である。

深鉢は、平坦な底部から胴部は外寄気味に伸び、反転して外に開く口縁部を形成している。口径42cm、器高50cmを測る。

胴部外面には煤、底部の内側には炭化物が付着している。また胴部の底に近い部分は打ち欠かれており、煮炊きに使用していたものを、埋葬に転用したことが伺える。

この埋甕のすぐ東側の土壌では、浅鉢が出土している (Fig. 8)。鉢は精製の丁寧な作りで、ほぼ全形を復元できることから、意図的に埋められたものであろう。



埋甕の出土状況（東から）

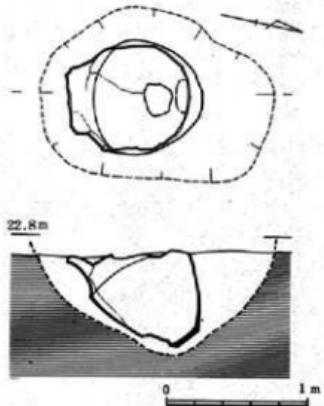


Fig.7 埋甕の出土状況（上）と実測図（右）  
(縮尺1/6)

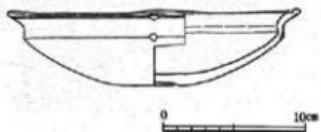
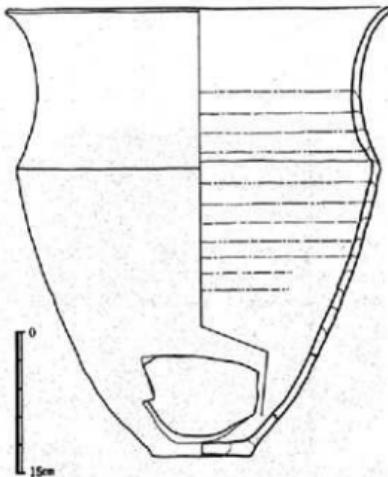


Fig.8 埋鉢の出土状況（右）と実測図（左）（縮尺1/4）

## 河川

A-2・3区からB-2区にかけて南北に流れる河川を検出した。河川の流れはFig. 4に示す範囲であるが、この流路は一時期に存在したのではないようだ。それは、出土遺物の時期が地区によって異なっていることからも伺える。

河川の時期は縄文晩期を上限とし、弥生後期、古墳時代前期～後期を下限としている。

A-3区では、東側を中心に護岸のための杭列や10本程度の枝をつる草で編み合させたものなどが見つかった。またこの付近では、底に穴を開けた古墳時代の甕やミニチュアの土器も出土しているので古代の人々が水際で祭祀を行なったことも想像できる。



掘り出された河川の流路（A-3区南から）



工事と併行して掘り出された河川（A-2・A-3区北上空から）

A-3区の河底では、径1m近くもある広葉樹の大木2つが幹の真中で断ち割られた状況で出土した。この木の周辺からは縄文時代晩期から弥生時代にかけての突帯文土器が多く見つかっている。これらの木々が人為的に割られたものかどうかは不明である。



河川に流れ込んだ大木（A-3区）

護岸には、右の写真のように高床倉庫の鼠返しを利用したものもある。横木に使われた径10cm程度の木のなかには、建物の柱材も含まれているようである。A-2区の南側では倉庫の扉なども出土している。



護岸に再利用されていた鼠返し（A-3区）

取付1号排水路では、古墳時代の井堰が検出された。河川の両岸には必ず耕地が営まれていた筈だが、後世の水田開発によって削平されてしまったようである。

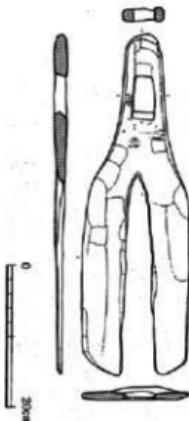
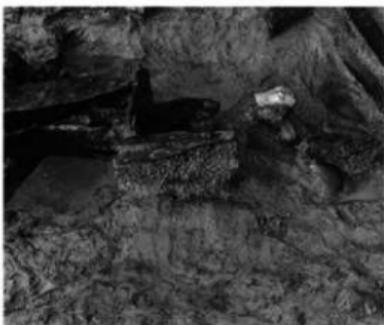
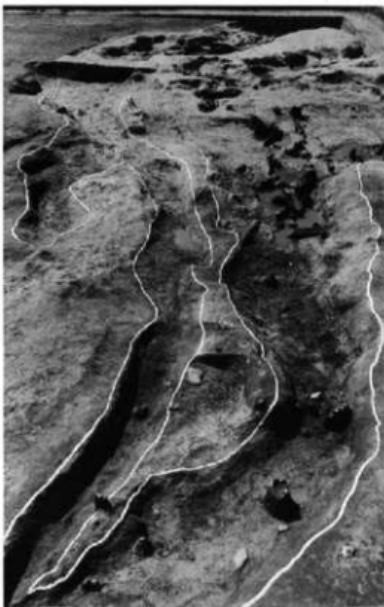


井堰の出土状況（取付1号排水路北から）

A-2区の北側河川では弥生後期の土器が埋土から多く出土しており、二又鋸や木柄なども共伴している。この他に木製農具はB-2区の南側でえぶりの先や、豊作などが見つかっている。

河川は南北によそ230mにわたって掘り下げを行なったが、A-2区の南側のように、調査期間の制約から、流路を確認して埋め戻した部分もある。古墳時代の河川が南西から北東にかけての流路であったことは出土遺物の分布からほぼ推定できる。

また縄文晩期を上限とする流路は、圓場の北側の西箇遺跡22・23次調査地区につながることは明らかであるが、上流の状況が今一つ明らかになっていない。弥生後期の流路を含めて今後の調査課題である。



掘り出された河川の流路（上）Fig. 9 出土した二又鋸（左）とその実測図（右）（縮尺1/8）

## 第4章 第2次調査の概要



拝塚古墳全景

## 第2次調査の概要

### 調査経過

昭和63年度の入部地区的圃場整備計画地域は早良区大字重留字塚本・松本・町田が含まれる。計画面積は約16.2ha、この内、構造物の面積は約1.5haである。発掘調査の対象は構造物、及び切土施工対象の田面であるが、本調査を実施する前に遺跡の存在の有無及び、対象面積を確定する必要があるため、5~6月の間に試掘調査を実施した。その結果、縄文時代から中世までの遺跡がほぼ全域に存在することが判明した。県・市の農政担当者との協議を重ねた結果、盛土工法により、保存地域を拡大し、調査対象面積の縮小を計ることにした。又、大河川の跡に入る地域は規模確認の調査のみにとどめることとし調査から除外した。しかしながら、当初は調査対象を約3haに縮めて、出発したが、施工時の不注意から保存地域の遺跡が破損を受ける事態も生じたため、最終的には約4haについて発掘調査もしくは規模確認調査を行った。坪塚古墳地区は一部が削平の対象となっていたが、規模確認によって前方後円墳であることが判明したため、県・市の農政担当者、及び組合理事との協議の末、盛土保存することが決まった。よって、坪塚古墳に関してのみ、規模確認調査を行ったが、他の遺構の発掘調査は極力避けた。同様に、第16地点に於いては施工側によって方形周溝墓群の一部を破壊されたが、本調査を将来に託し、規模確認にとどめ、施工側には原状復元を指導、お願いした。

### 試掘調査

調査に先立って農作物の作付有無の状況調



第7-I 地点 S D 11 河川跡作業風景



坪塚古墳周溝 2 トレンチ作業風景



坪塚古墳北側くびれ部作業風景

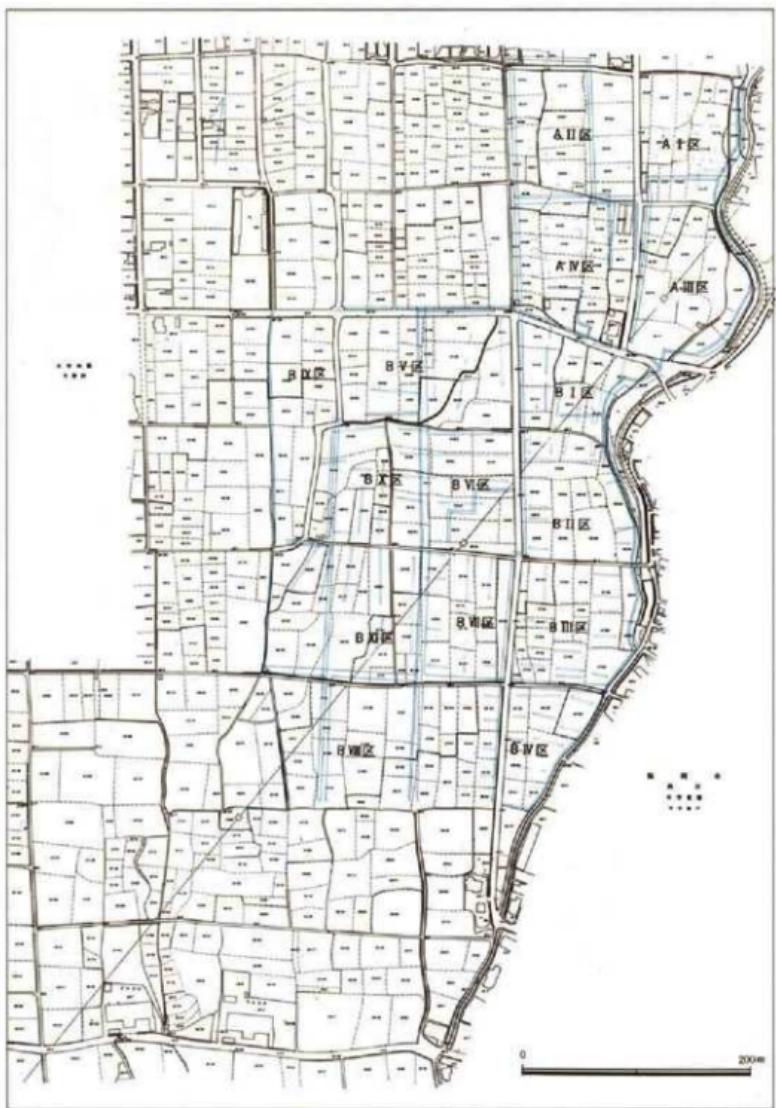


Fig.10 第2次調査試掘調査位置図 (縮尺 1/5,000)

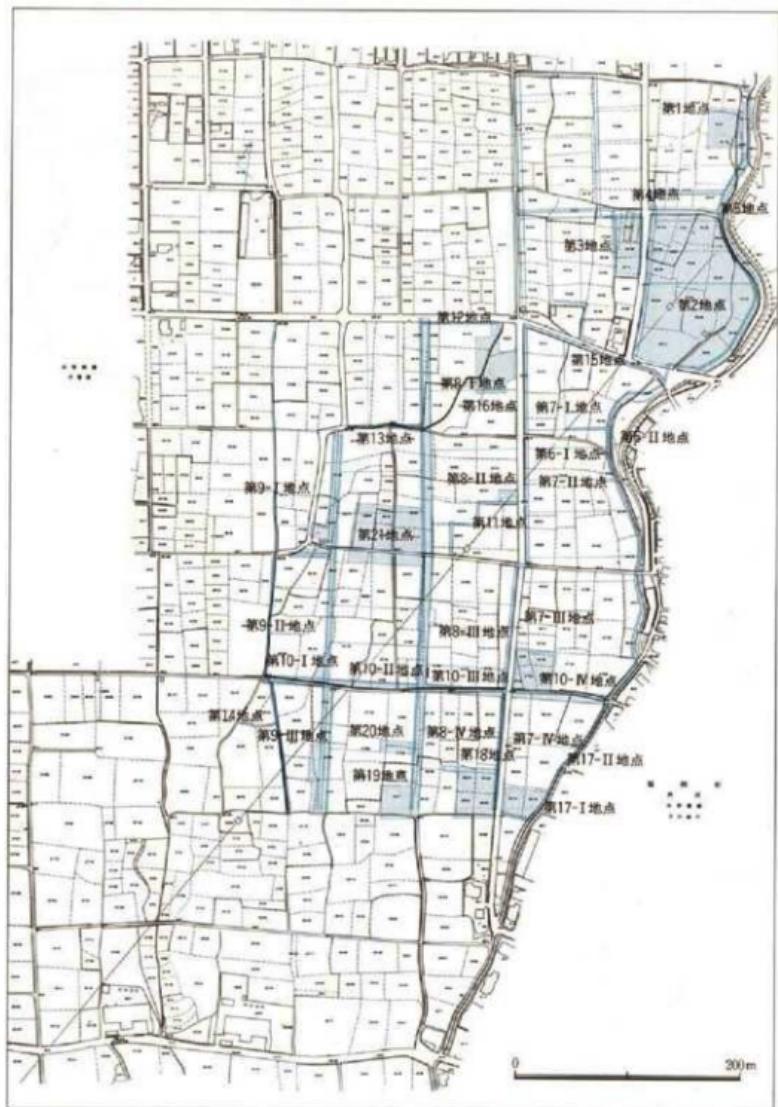


Fig. 11 第2次調査の調査区位置図 (縮尺 1/5,000)

査と、遺跡の分布内容を把握し易くするために地区割りを行った。地区割りは既設の公道を境として南側と北側にA・B区の大地区を設け、更に農道などからA区はI～IV区、B区はI～IV区の小地区に細分した。各トレンチの呼称は小地区毎に通し番号を与え、例えばB I区1T、或いはA III区2Tなどと呼称した。試掘の掘削は重機（バックホー）を用いたが、記録上の都合により作業員も投入した。

今回の試掘では農作物の撤去が不充分であったため、重機の移動や試掘工程に支障をきたし、更には田植え開始と共に上流より湧水、田越し水が入り始め、約4.6haが未試掘の状態となった。

試掘調査の詳細は本報告に委ねるが、遺構の概要を時代毎に説明したい。付図のとおり、A区からB区に河川跡が南北に貫流し、又は分岐しているが、これらの河川は弥生時代から古墳時代に形成され、埋没時期は中世と考えられる。特に、B V区の河川跡は第1次調査の河川跡につながる。古墳時代の遺構はA III区～B I・II・III区、V・VI区を中心に広がっている。弥生時代の遺構は旧河川跡や小谷を境にして3ヶ所の遺構群があるが、大きな面の広がりをもたない。中世は「土生造園」（非農用地）より南側に分布している。整地面が存在しており、その範囲は約150m四方に限られるようである。绳文時代の遺構は河川跡、溝、埋葬、住居跡もあるが、これらは「土生造園」の南側に位置しており、第1次調査で検出した住居跡群とは河川跡が境になっている。律令時代の遺構は「土生造園」の北東側に限られ、100m四方を超えることはない。

Tab.2 第2次調査調査地点一覧表①

地点名	構造物・田面名称	計画面積	調査面積	地 区 名	期 間	備 考
8 支線	14号道路	3,000m <sup>2</sup>	2,460m <sup>2</sup>	B V～V III区	'88.12.10～'89.4.2	
6 支線	16号道路	1,000m <sup>2</sup>	199.5m <sup>2</sup>	B I～III区	'88.10.18～'88.10.29	
5 支線	17号道路	1,180m <sup>2</sup>	864m <sup>2</sup>	A I区	'89.1.26～'89.2.2	
10 支線	18号道路	2,000m <sup>2</sup>	2,135m <sup>2</sup>	B II～VII・X I区	'88.11.30～'89.3.20	
3 支線	20号道路	530m <sup>2</sup>	125m <sup>2</sup>	A II区	'88.9.20～'88.11.1	
9 取付	1号道路	560m <sup>2</sup>	770m <sup>2</sup>	B X区	'88.10.19～'88.11.1	
9 取付	2号道路	440m <sup>2</sup>	565m <sup>2</sup>	B V III区	'88.11.10～'89.2.25	
9 支線	12号排水路	1,000m <sup>2</sup>	1,791m <sup>2</sup>	B VIII・X I区	'88.10.19～'89.2.25	
7 支線	13号排水路	1,300m <sup>2</sup>	1,728m <sup>2</sup>	B I・II・VII・VIII区	'88.10.28～'88.11.25	
15 支線13-1号排水路		195m <sup>2</sup>	186m <sup>2</sup>	B I区	'88.10.18～'88.10.29	
11 支線13-2号排水路		80m <sup>2</sup>	204m <sup>2</sup>	B VI区	'89.2.27～'89.4.1	
4 支線	14号排水路	600m <sup>2</sup>	712m <sup>2</sup>	A III区	'88.12.18～'89.2.7	
9 取付	1号排水路	35m <sup>2</sup>	76m <sup>2</sup>	B II区	'88.10.19～'88.11.1	
3 取付	2号排水路	290m <sup>2</sup>	110m <sup>2</sup>	A II区	'88.9.20～'88.11.1	
14 支線	25号用水路	446m <sup>2</sup>	570m <sup>2</sup>	B VII・X I区	'89.2.17～'89.3.11	
8 支線	26号用水路	500m <sup>2</sup>	1,323m <sup>2</sup>	B V～V III区	'88.12.10～'89.4.2	
12 支線26-1号用水路		60m <sup>2</sup>	106m <sup>2</sup>	B V区	'89.3.10～'89.3.14	
13 支線26-2号用水路		70m <sup>2</sup>	201m <sup>2</sup>	B V区	'89.1.11～'89.3.2	
5 支線	27号用水路	770m <sup>2</sup>	732m <sup>2</sup>	A I・A III・B I・II・VII区	'88.10.18～'89.2.2	

Tab.2 第2次調査調査地点一覧表②

地点名	構造物・田面名称	計画面積	調査面積	地区名	期間	備考
6 支線 27-1号用水路		105m <sup>2</sup>	39m <sup>2</sup>	B I 区	'88.10.18~'88.10.29	
15 支線 27-2号用水路		124m <sup>2</sup>	124m <sup>2</sup>	B I 区	'88.10.18~'88.10.29	
3 支線 28号用水路		450m <sup>2</sup>	50m <sup>2</sup>	A II - IV 区	'88.9.20~'88.9.24	
9 54-1 田面		782m <sup>2</sup>	400m <sup>2</sup>	B V III 区	'89.1.13~'89.2.25	
9 55-1 田面		4,155m <sup>2</sup>	120m <sup>2</sup>	B X I 区	'88.11.30~'88.12.19	
9 55-3 田面		1,089m <sup>2</sup>	232m <sup>2</sup>	B X - XI 区	'88.10.19~'88.11.1	
19 59-1 田面		3,552m <sup>2</sup>	714m <sup>2</sup>	B V III 区	'89.3.20~'89.4.2	第1回のみ調査
20 59-2 田面		4,000m <sup>2</sup>	290m <sup>2</sup>	B V III 区	'89.3.28~'89.4.2	第1回のみ調査
21 60-3-2,4 田面		4,000m <sup>2</sup>	4,000m <sup>2</sup>	B V II 区	'89.4.7~'89.4.11	確認調査
18 62-1 田面		2,318m <sup>2</sup>	1,300m <sup>2</sup>	B V III 区	'89.1.19~'89.3.1	
16 63-9 田面		4,139m <sup>2</sup>	2,000m <sup>2</sup>	B V 区	'89.2.18~'89.4.17	確認調査
16 63-10 田面		389m <sup>2</sup>	389m <sup>2</sup>	B V 区	'89.2.18~'89.4.17	確認調査
17 65-1 田面		2,710m <sup>2</sup>	750m <sup>2</sup>	B VI 区	'89.1.31~'89.3.6	
10 66-1 田面		3,460m <sup>2</sup>	1,250m <sup>2</sup>	B III 区	'88.12.5~'89.3.23	
3 67-5 田面		1,064m <sup>2</sup>	1,064m <sup>2</sup>	A II 区	'88.9.20~'88.11.1	
2 68-1 田面		6,050m <sup>2</sup>	6,050m <sup>2</sup>	A III 区	'88.6.23~'89.2.10	範囲確認調査
2 68-2 田面		2,275m <sup>2</sup>	2,275m <sup>2</sup>	A III 区	'88.6.23~'89.2.10	#
2 68-3 田面		1,612m <sup>2</sup>	1,612m <sup>2</sup>	A III 区	'88.6.23~'89.2.10	#
2 68-4 田面		1,298m <sup>2</sup>	577m <sup>2</sup>	A III 区	'88.6.23~'89.2.10	#
1 68-7 田面		3,891m <sup>2</sup>	1,125m <sup>2</sup>	A I 区	'88.11.8~'88.12.23	

Tab.3 第2次調査地点別遺構・遺物一覧表①

調査地名	地区名	構造物・田面名	遺構件数	遺構	遺物	時代・時期	備考
1	A I 区	68-7 田面	1面	堅穴住居跡 4軒、土塙 4基、K川跡 1基、溝 4条	土塙器、須恵器、中国青磁、白磁。	古墳時代~室町時代	
2	A III 区	68-1~4 田面	1面	堅、堅穴住居跡 8軒、溝 3条、井戸 1基、前方後円墳 1基、方塙 1基、転延遺構 4基、土塙 2基、K川跡 3条。	土塙器、須恵器、瓦器、瓦質土器、新州窯系白磁、中国青磁、埴輪、灰玉、木製品	古墳時代~室町時代	方塙は3地点にまたがる
2	A III 区	支線14号排水路	1面	堅の一部、堅穴住居跡の一部、前方後円墳の一部、方塙の一部	土師器	古墳時代~室町時代	2地点に接続
3	A IV 区	支線20号道路 取合2号排水路 支線25号排水路 67-5 田面	1面	方塙 1基、河川跡 1条	土師器、冰生式土器、中国古墳	弥生時代~室町時代	方塙は2地点にまたがる
4	A IV 区	支線24号排水路	1面	河川跡 2条、土塙 3基	土師器、須恵器	律令時代~室町時代	
5	A I - III 区	支線17号道路 支線27号排水路	1面	河川跡 1条、溝 2条	土師器、采光窓	律令時代~室町時代	
6-I	B I 区	支線27-1号用水路	1面	溝 4条	土跡跡	古墳時代~室町時代	
6-II	B I 区	支線27号用水路 支線16号道路	1面	土塙 2基	土師器	古墳時代~室町時代	
7-I	B I 区	支線13号排水路	1面	河川跡	土師器、吉縫	古墳時代~室町時代	
7-II	B II 区	#	1面	堅穴住居跡 32軒 - a、河川跡 1条、溝 5条、土塙 3基	土師器、須恵器、滑石製造品、滑石器、石材、小玉	秦半時代~律令時代	滑石の状態では円筒状が出土。

Tab.3 第2次調査地点別遺構・遺物一覧表②

調査地點	地区名	遺物・遺跡名稱	遺構面數	遺 墓	遺 物	時代・時期	備考
7-I	B 雜区	"	1面	溝 4 条, 土塁 16 基	土師器	縄文時代～ 古墳時代	
7-II	B 雜区	"	2面	溝 14 条, 土塁 19 基	縄文式土器, 石器, 土 器等	縄文時代～ 古墳時代	
8-I	B V 区	文鏡14号道路 取付26号用水路	1面	豎穴住居跡 7 剛, 潟 6 条 河川跡 2 条	土師器, 磁器等, 木製 品	古墳時代～ 律令時代	
8-II	B 雜区	"	1面	豎穴住居跡 8 剛, 潟 5 条	縄文式土器, 土塁器, 石器等	縄文時代～ 古墳時代	
8-III	B 雜区	"	2面	豎穴住居跡 9 剛, 潟 5 条, 土塁 65 基, 土塁墓 1 基, 亂松墓 25 基, 木格墓 1 基	縄文式土器, 你生式土 器, 土師器, 古器, 陶 器等, 鋼製芯引き, 鋸, 刀	縄文時代～ 古墳時代	
8-IV	B 雜区	"	2面	方形周溝式遺構, 潟 5 条, 土塁 3 基, 柱穴	你生式土器, 土師器	你生時代～ 古墳時代	
9-I	B X 区	取付1号道路 55-3田面	1面	河川跡 1 条, 獄立柱建物 1 棟	土師器, 磁器等	古墳時代	
9-II	B 雜区	文鏡12号用水路 55-1田面	1面	豎穴住居跡 4 剛, 潟 5 条, 土塁 16 基	縄文土器, 土師器	縄文時代～ 古墳時代	
9-III	B 雜区	取付2号道路 文鏡12号用水路 54-1山面	2面	豎穴住居跡 7 剌, 潟 4 条, 土塁 13 基, 獄立柱建物 1 棟, 井戸 1 基	縄文式土器, 你生式土 器, 獄付 1 式土器, 石 斧, 石庭 1, 石臼 1	縄文時代前期 你生時代中期 後晉時代	
9-IV	B X 区	取付1号用水路	1面	河川跡 1 条	土師器, 磁器等	古墳時代	
10-I	B 雜区	文鏡18号道路	2面	溝 1 条, 井戸 1 基, 土塁 29 基	縄文式土器, 土師器	縄文時代～ 古墳時代	
10-II	B 雜区	文鏡18号道路	1面	河川跡 1 条, 潟 1 条	縄文時代後期, 土 師器, 青磁, 白磁	縄文時代～ 古墳時代	
10-III	B 雜区	文鏡18号道路	2面	溝 11 条, 井戸 1 基, 土塁 29 基	縄文式土器, 土師器	縄文時代～ 古墳時代	
10-IV	B 雜区	文鏡18号道路 56-1田面	3面	豎穴住居跡 3 剌, 潟 25 条, 土塁 50 基, 亂松墓 1 基, 土塁墓 1 基, 獄立柱建物 4 棟, 井戸 4 基	縄文式土器, 你生式土 器, 土師器, 青磁	縄文時代～ 古墳時代	
11	B V 区	文鏡13-2号用水路	1面	豎穴住居跡 4 剌, 潟 4 条, 土塁 2 基	磁器等, 土師器, 磷石 製品, 玉, 不透明水晶	古墳時代	佐賀縣は玉作り 工房跡の可能性 あり
12	B V 区	文鏡29-1号用水路	1面	河川跡 1 条		古墳時代	
13	B V 区	文鏡29-2号用水路	1面	河川跡 1 条	土師器	古墳時代	7-1地点に接続
14	B 雜+V 区	文鏡25号用水路	2面	溝 4 条, 土塁 3 基	縄文式土器, 土師器	縄文時代～ 古墳時代	
15	B I 区	文鏡13-1号用水路 文鏡27号用水路	1面	河川跡, 柱穴, 土堆		古墳時代～ 古墳時代	
16	B V 区	63-9-10田面	1面	方形周溝竪 28 基, 河川跡 1 条, 亂松墓 25 基, 獄立柱建物, 火葬場 1 基, 千廻 13 基, 豊穴住居跡 16 條, 石臼墓 1 基, 土塁墓 5 基, 小形豎穴石室墓 1 基	你生式土器, 土師器, 磁器等, 爐上蓋墓 7 個, ガラス小片 103 個	你生時代～ 律令時代	遺構認定済
17-I	B IV 区	65-1田面	1面	溝 13 条, 土塁 9 基	縄文式土器, 土師器	縄文時代～ 古墳時代	
17-II	B IV 区	文鏡27号用水路	1面	柱穴, 河川跡		縄文時代～ 古墳時代	
18	B 雜区	62-1田面	1面	溝 34 条, 土塁 4 基	土師器, 磁器等	奈良時代～ 古墳時代	
19	B 雜区	59-1田面	1面	溝 1 条, 獄立柱建物 3 棟, 井戸 6 基	土師器, 磁器等	後晉時代	第 2 面は未調査
20	B 雜区	59-2田面	1面	溝 9 条, 井戸 1 基, 土塁 1 基, 獄立柱建物 3 棟	土師器, 青磁, 白磁	古墳時代	第 2 面は未調査
21	B 雜区	60-3-2田面 60-4田面	1面	溝 2 条, 豊穴住居跡, 柱穴	你生式土器, 磁器等, 土 師器, 陶器	你生時代～ 律令時代	遺構認定済

## 第1地点 (68-7田面)

遺構面は淡黄色粘質土の堆積土である。調査区北側は旧河川によって削平を受ける。河川跡の埋土は灰白色粗砂で、遺物はない。遺構は古墳時代の竪穴住居跡4軒、中世の溝1条、金屑川の旧河道等を検出した。住居跡にはベッドやカマドをもつものがある。SC03住居跡はベッ



第1地点 全景（北から）



SC03古墳時代住居跡（北から）

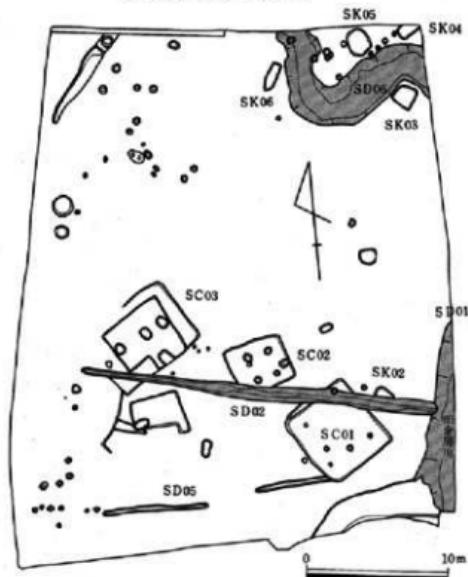


Fig.13 第1地点 遺構配置図 (縮尺 1/400)

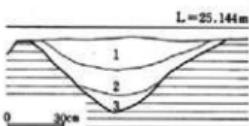


Fig.12 SD02溝土層図 (縮尺 1/30)

ドをもち、平面形は長方形を呈す。主柱は2本で、土師器甕や複合口縁壺が出土した。SC02住居跡は東側にカマドをもつ。主柱は4本で、6世紀代の須恵器壺が出土している。SC01は方形プランで、主柱は4本である。遺物は小型丸底壺等が出土している。これらの住居跡は4世紀から6世紀の幅をもつ。SD01溝は調査区の中央に位置し、東西方向に延びる。断面形はV字形を呈する。

遺物は白磁、青磁などの輸入陶磁器がある。時期は12~13世紀と考えられる。

## 第2地点（拝塚古墳・68-1~4田面）

古墳は大字重留字塚本に所在する。試掘調査の結果、前方後円墳であることが判明したが、同時に律令時代~中世までに溝の開削や、河川の付けかえ、江戸時代に外周の水田化によって古墳が削られ、形を変えて行く過程も判明した。第2次大戦直後までは円墳として遺存していた状態が早良郡志記載の写真に認められる。昭和27年の開田の土取りに際し、墳丘は全て失われ、わずかに不整円形状の畦を残すのみに至った。土取り作業に従事した人々のこの時の説明では、墳丘に石が詰められており、塚の内部から真赤に朱を塗った板石（石棺か？）や玉が出土したという。調査でも顔料の付着した板石の割材を多数採集している。又、鐵刀は数本出土したそうであるが、現存はしていない。

古墳は通称「拝塚」、「灰塚」と呼称されているが、この名称の由来は中世の伝承にまつわる。福岡市の文化財分布地図では「灰塚」と記されているが、「筑前国続風土記拾遺」や「附録」などでは「拝塚」の名称が用いられており、今後は「拝塚古墳」の名称に統一したいと思う。



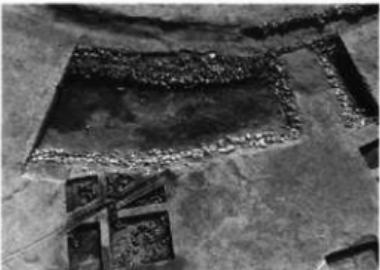
拝塚古墳前方部（西から）



拝塚古墳前方部（東から）



周溝2トレンチの状態（西南から）



周溝6トレンチと2号祭祀の状態

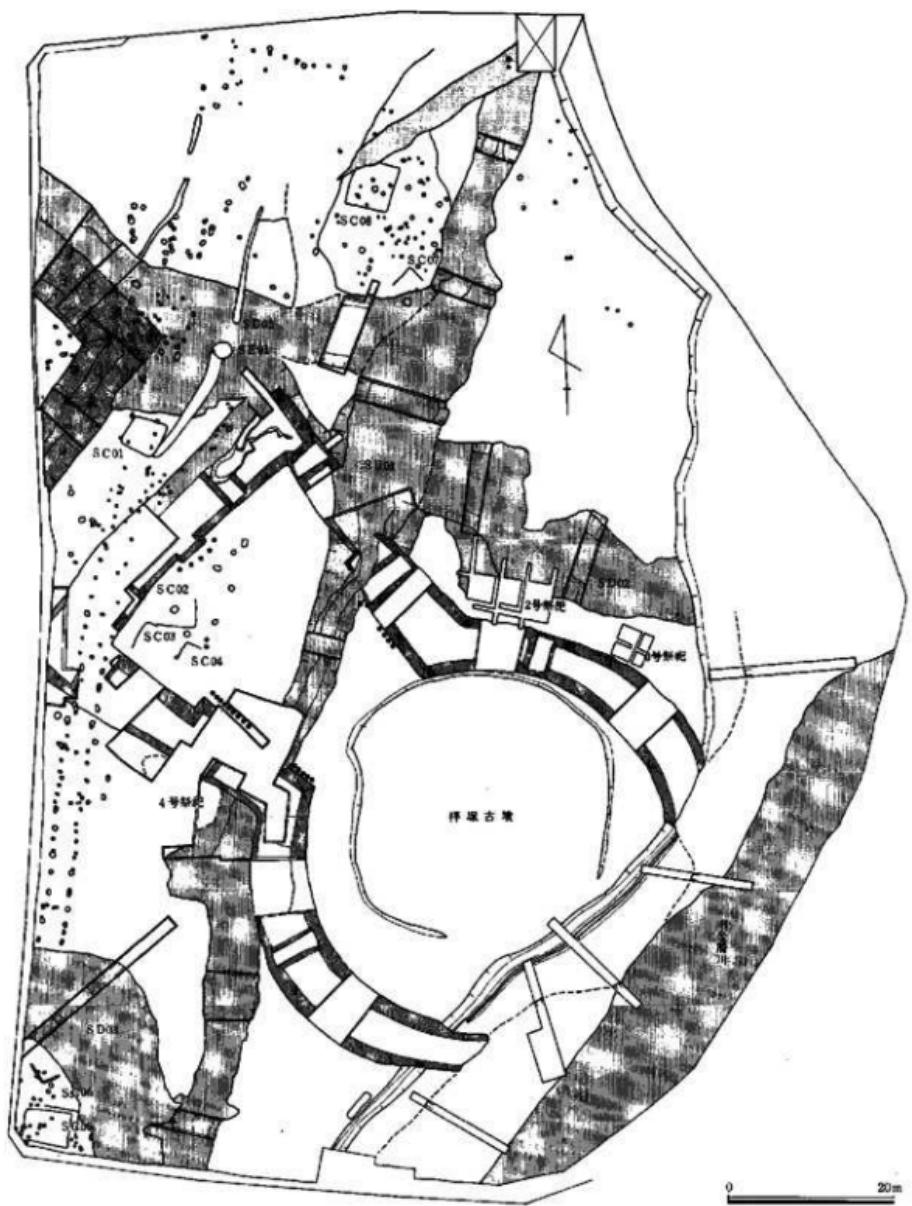


Fig.14 第2地点 遗構配置図 (縮尺 1/700)

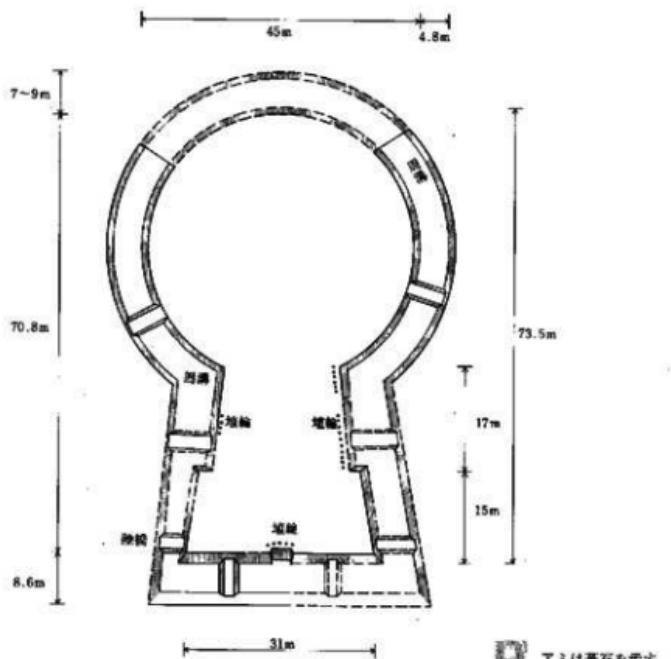


Fig.15 押塚古墳模式図

古墳は上述の通り、墳丘の大部分を失っている。遺存した墳丘の平面プランは前方部の側縁が方形状に張り出しており、類例はない。規模を推定すると、全長75m、後円部直徑45m、前方部前面の幅約31mを測る。この古墳には鍵穴形の周溝が巡っており、幅約7~9m、深さ約0.75~1.3mを測り、南側の周溝が深くなる。周溝内には陸橋が設けられており、前方部に2ヶ所、後円部に6ヶ所存在する。幅は約3~3.5mを測る。墳丘は一段目が遺存しており、前方部の一部には壺形埴輪列が認められ、一部には倒れた状態の完形品が出土した。円筒埴輪は非常に少なく、周溝内に転落した状態で出土するが、小破片で、磨耗が著しいところから、元来、墳丘の二段目以上に配置されていたものと考えられる。葺石は墳丘と周溝外壁に施しているが、前方部前面の周溝外側壁には施していない。陸橋と葺石の関係では、陸橋の継断トレンチに於いて墳丘接続側では葺石が存在し、周溝外側接続部分には葺石が存在しないことから、陸橋や葺石の施工順位に関わる問題を提起している。周溝内からは埴輪の他、壺形土器や高杯などの

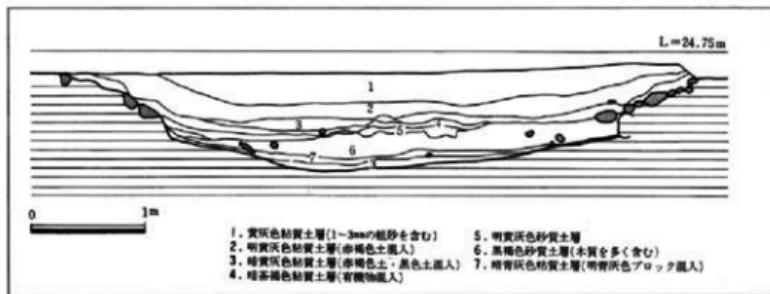
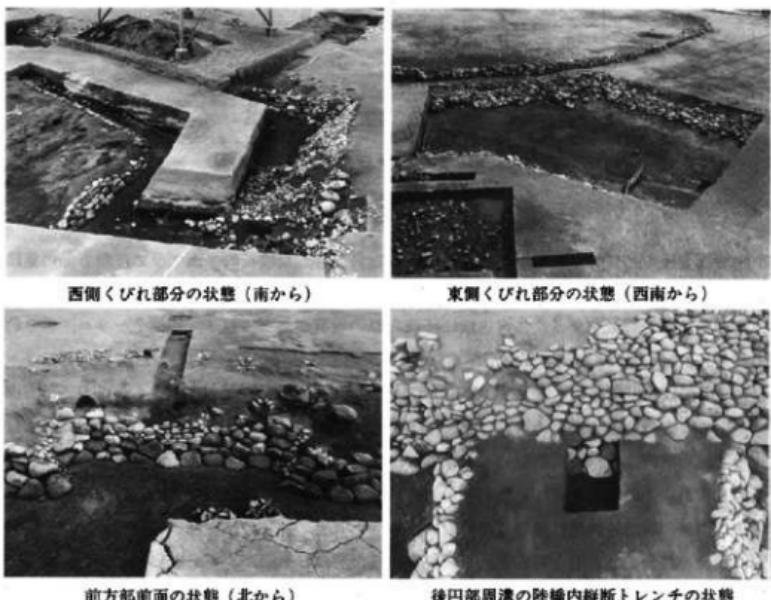


Fig.16 周溝6トレンチ土層図 (縮尺 1/50)

祭肥土器が出土している。5世紀初頭から5世紀中頃の幅をもっており、追葬があったことを考慮できる。築造時に關する祭祀については4ヶ所発見したが、別稿で述べる。出土した埴輪は壇形、朝顔形、円筒形、家形、櫛形、軌形、短甲形、草摺形、圓形、人物形がある。人物形埴輪は前方部前面から出土したが、この人物形には手足の表現が無く、胸部には条線によって



櫛状の文様を施している。武人像と考えたい。その他の遺物には木柵、杭、賛の子状木製品が周溝内から出土した。

#### 祭祀遺構・遺物

拝塚古墳に関する祭祀遺構は周溝外側に4ヶ所認められる。いずれも周溝外周に接しており、掘り方などの明確な形を示していないが、築造に際しての整地層内に土器群が存在する。2・3・5号祭祀遺構は周溝外壁の護岸状礫群の後背に存在し、4号祭祀遺構は旧河川跡の軟弱な地盤を補強した整地層にある。祭祀土器には高环、小型丸底壺、二重口縁壺、甌、鉢などがある。2号祭祀遺構では小型丸底壺が20数個体出土したが、ことごとく盗難にあった。周溝内の祭祀遺物には土器と木製品がある。土器は周溝底に堆積した厚さ20~40cmの腐植土層の下位又は、上位から出土しており、時期幅をもっている。土器は小型丸底壺、高环が中心であり、甌形土器は少ない。賛の子状木製品は、前方部周溝南側の陸橋部に接して出土した。長さ3m、直径2~3cmの自然木約50本を絆に、長さ2.5m、直径4~5cmの加工木5本を縫にして組み合わせる。縫木の頭には切り込みをもっている。目隠し状に利用したものか不明である。



前方部南側の壺形埴輪列（北から）



10トレンチ壺形埴輪出土状態（西から）



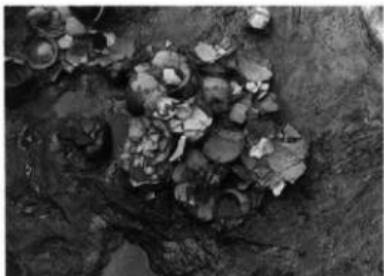
前方部前面の人物埴輪出土状態



前方部南側周溝内賛ノ子状木製品出土状態



坪塚古墳 2号祭祀土器出土状態



坪塚古墳 4号祭祀土器出土状態



第3地点 重留2号墳（北東から）

### 第3地点（重留2号墳・67-5田面）

第2地点の西側に位置する。遺構は方墳、河川跡を検出した。方墳は西側を中世の河川跡で削平されており、又、中央に道路が横断しているため、全体形を把握できない。平面形は歪な長方形を呈し、長軸約13m、短軸約9mを測る。又、幅約3mを測る周溝が四周を巡るものと推測できる。西辺の中央部分には小さな陸橋状の突出部がつき、幅2.5m、残存長0.6mを測る。主体部は削平のため不明である。葺石や埴輪の出土はない。遺物は墳丘上と周溝の中から布留

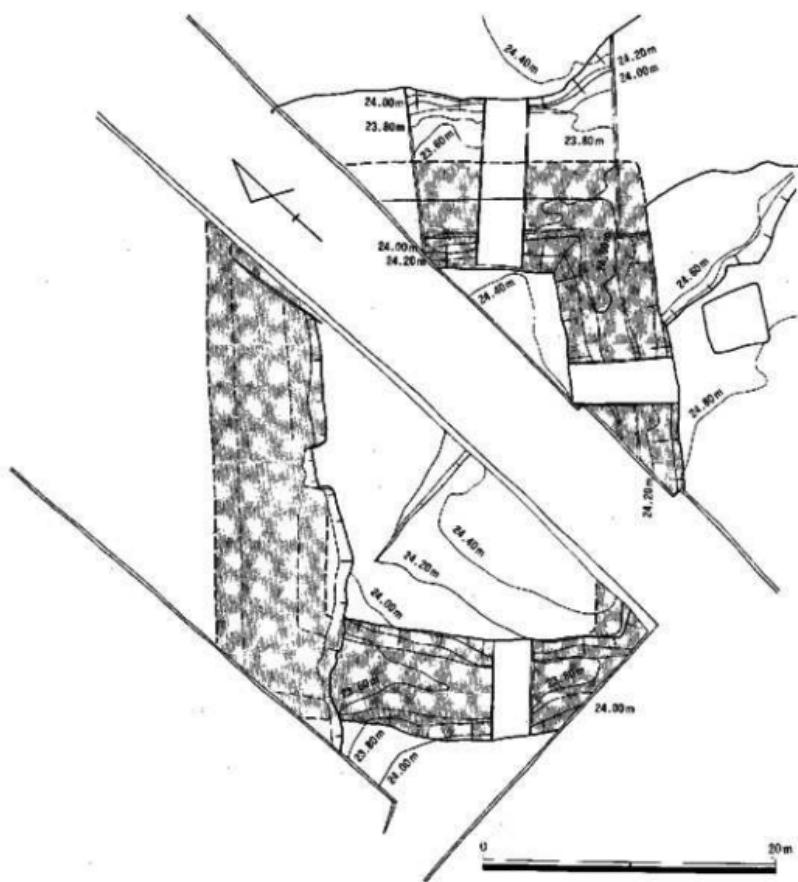


Fig.17 重畠 2号墳実測図 (縮尺1/400)

式併行期の土師器の甕、壺等を検出した。この方墳は拝塚古墳の前方部前面に位置し、しかも墳丘の中軸が一致するなど拝塚古墳との強い関連を看取できる。

#### 第4・5地点（14号水路・17号道路）

第4地点では第3地点から続く中世の河川跡、柱穴、土壙等を検出した。河川跡は北東に流

路をとり、調査区内では河川跡の東岸部分を検出した。東側の第5地点では北東方向に流下する河川跡を2条検出した。1条は第2地点からつづくSD01溝の延長部分で、幅4mを測る。他の1条は幅約10mを測り、出土遺物は少ないが、覆土の状態より時期は中世と考えられる。又、調査区の北側では第1地点で検出した旧金屑川の東岸部分を検出している。

### 第6地点（27-1号用水・16号道路）



第4地点 全景（西から）



第5地点 全景（南から）



第6地点 全景（西から）



第6地点 全景（北西から）

この地点は東側に金層川が、南西側に旧河川跡が存在するため三角洲状を呈している。地山は黄褐色粘質土の堆積土である。現在の金層川は中世に付け換えられた可能性が高く、本来の地形は油山から舌状地形を呈していたものと考えられる。試掘調査では布留式土器併行期の壺形土器を伴なう土塚墓や古墳時代の住居跡を検出している。調査対象地域の大部分が旧河川跡もしくは、金層川の河岸に相当するため本調査地区を台地上に限った。尚、現在の金層川の川幅は約15mであるが、かつては約35m以上あったものと推定できる。遺構は土塹、柱穴を主とし、他に河川跡、中世の溝などがある。

### 第7-I・II・III・IV地点（13号排水路）

調査予定地は幅3m、長さ約400mを測る。縦長の調査範囲であるため、約100m毎にI～IVの4地点に分けて調査を実施した。I地点では調査地区の範囲全体に河川跡を検出した。幅は20m以上を測るもので、上層の灰色砂質土には中世の遺物を含むが、下層では弥生式土器が出土する。この河川路は南側で東西に分岐する。II地点は砂礫層の上部に黄褐色粘質土が堆積しており、この上面に約30軒の古墳時代住居跡を検出した。他に律令時代の建物も存在する。試掘調査では東西方向の大型掘り方の柱列を検出している。円面鏡はこの周辺から出土した。住居跡は切り合いが著しく、重層的に切り合っている。狭い調査範囲のため、住居跡のプランを明



第7-I・II地点 全景（北から）



第7-III・IV地点 全景（北から）

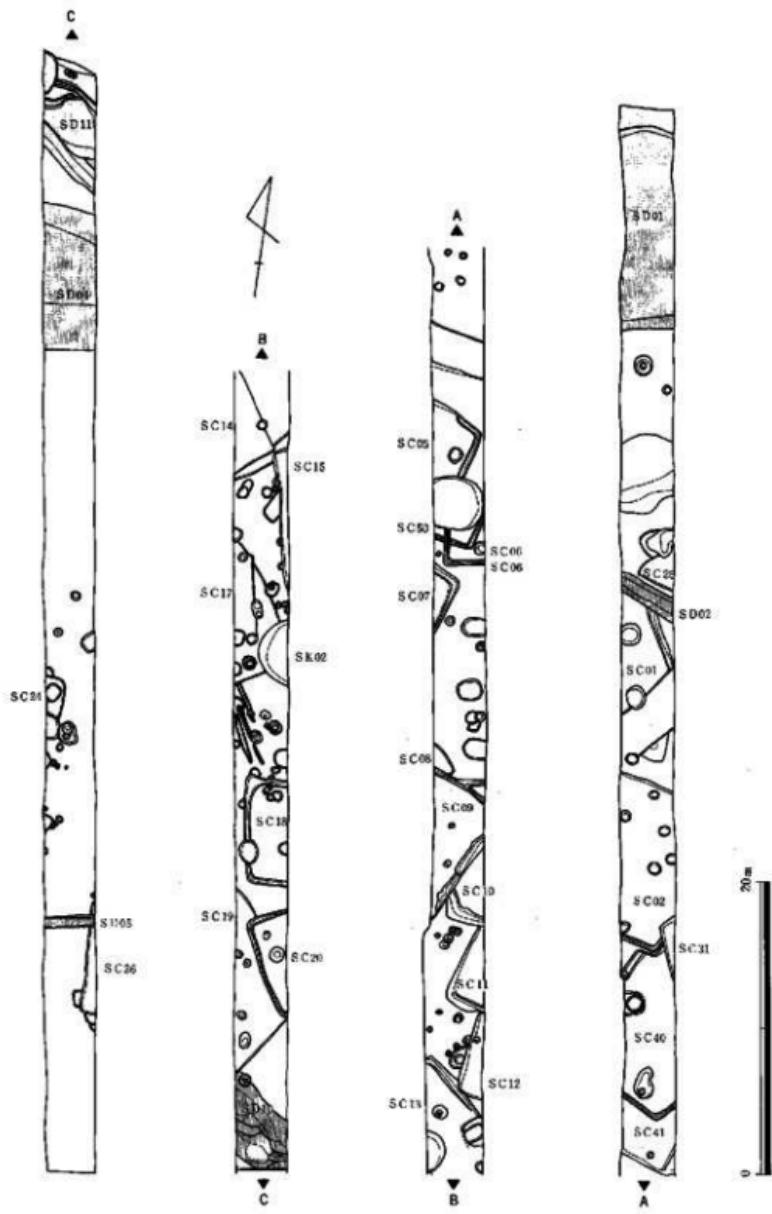
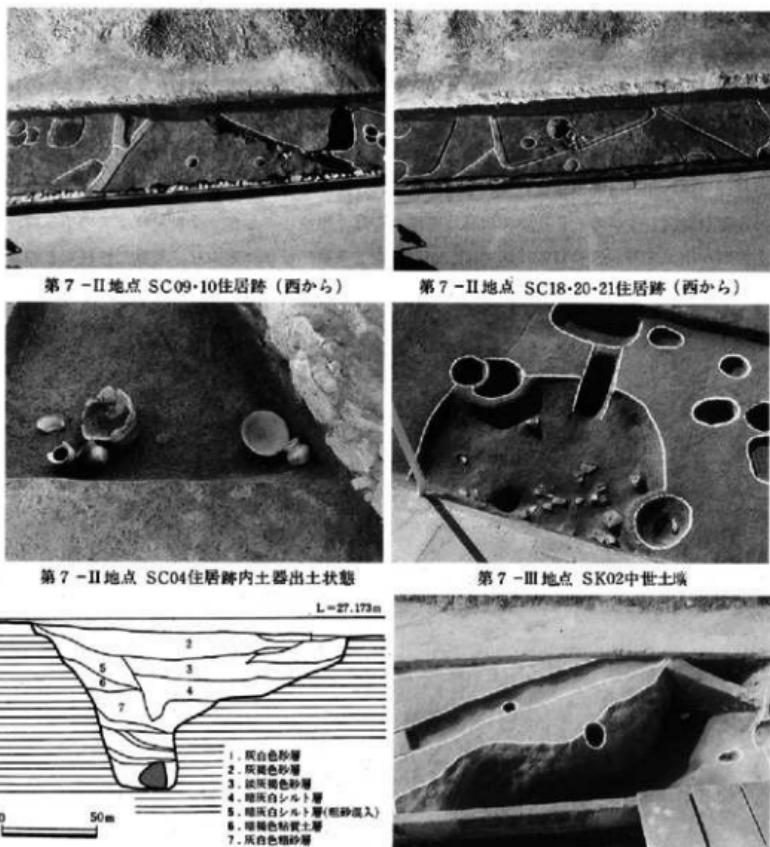


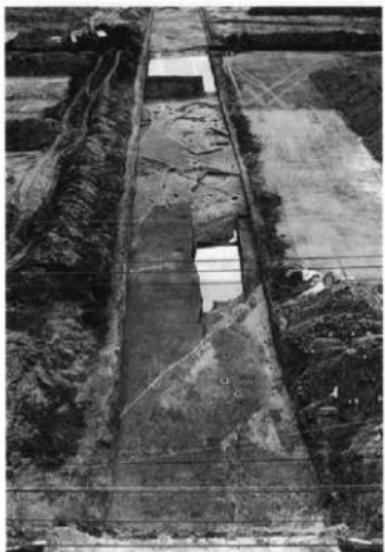
Fig. 18 第 7-I · II 地点 遺構配置図 (縮尺 1/200)



確に把握出来ない。耕作土の直ぐ下から深さ約50cmの間に存在する。平面形が方形プランをもつものが多く、一部にはベッド、カマドを有している。出土遺物より5世紀から6世紀の所産である。この内の滑石材を出土する住居跡は玉作り工房跡と考えられる。II・III地点との境には幅約5mを測る河川跡が存在する。III地点の遺構面は黄褐色粘質土である。ここでは縄文時代の河川跡及び、中世の遺構群を検出したが、いずれも第10地点に関連する遺構である。IV地点に至ると黄褐色粘質土の堆積は厚く、締まりが良好となるが、大きな遺構は少なく、pitを中心となる。やはり縄文時代晩期の河川跡を検出した。

## 第8-I・II地点（14号道路B V・VI区）

遺構面の削平は著しく、遺構の遺存状態は悪い。I地点の遺構面は黄褐色シルト質土で、II地点は暗黃褐色砂質土である。I地点の北端には第1次調査で検出した古墳時代の河川（SD11）が流下し、又、I・II地点の境には古墳時代の大河川跡（SD10）が横切る。SD10とSD11河川跡の間には5～6世紀代の集落が営まれ、SD10河川跡の南側には4世紀～6世紀代の集落が展開している。SD10河川跡は腐植土が厚く堆積しており、7世紀代までの須恵器、土師器が出土する。SD11河川跡ではしがらみを2条検出した。えぶり、馬銚、柱材などの木製品が出土した。その他には4世紀～7世紀までの土師器や須恵器が出土している。



第8-I地点 全景（北から）



第8-II地点 全景（南から）



Fig.20 SD11河川跡内しがらみNo.1実測図（縮尺 1/30）

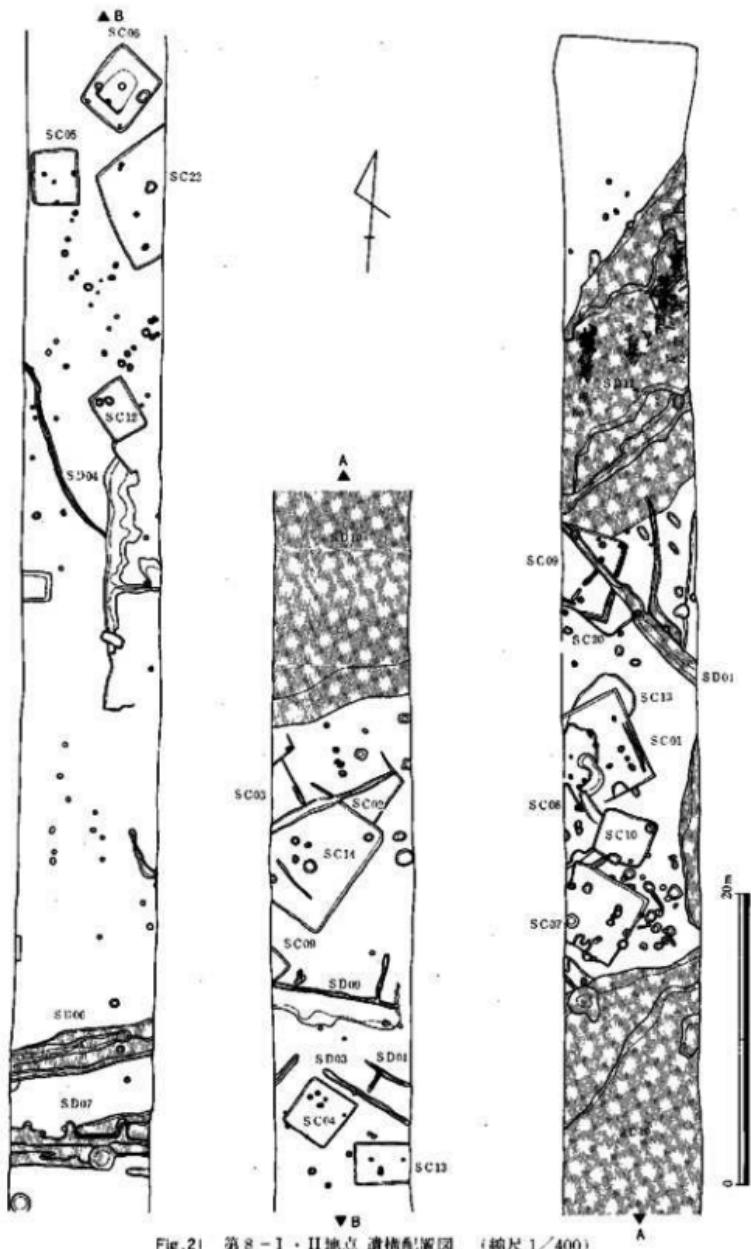


Fig.21 第8-I・II地点 道構配置図 (縮尺1/400)



第8-I地点 S D11河川跡内しがらみNo 1(西から)



第8-I地点 S D11河川跡内しがらみNo 2(西から)



第8-I地点 しがらみNo 1 内えぶり出土状態



第8-I地点 しがらみNo 2 内馬車出土状態



第8-I地点 S C07古墳時代住居跡(北から)



第8-II地点 S C06古墳時代住居跡(北から)

### 第8-III地点 (14号道路B VII区)

沖積地上の微高地に位置する。遺構面は2面あり、上面は中世、下面は縄文時代～弥生時代の遺構面である。中世の遺構は暗灰色粘質土の整地層に形成される。遺構は木棺墓1基、土塙墓1

基、掘立柱建物 2 棟、溝、柱穴などを検出した。木棺墓（S X2001）は鉄釘の位置から棺の規模を長さ約180cm、幅約60cmに推定することができる。棺の内外には龍泉窯系青磁碗 1、小皿 5、土師器皿 2、湖洲鏡 1 面、鉄製毛抜き 1、鉄 1などを副葬していた。S X01土塙墓は、長さ150cm、幅60cmを測る。土塙内には総数40枚余の土師器皿、小皿が副葬されていた。土師器は糸切り、ヘラ切りを含んでいる。一方、縄文時代～弥生時代の遺構は黄灰褐色粘質土の堆積土に形成される。縄文時代の遺構は調査区南側では晩期の溝、埋甕を検出した。又、調査区北側には段落ちがあり、縄文時代後・晩期の包含層が存在した。弥生時代の遺構は前期の竪穴住居跡 9 軒、貯蔵穴 16 基、妻棺墓 26 基などがある。竪穴住居跡は円形プランで、直径 4 ~ 6 m を測る。主柱が 4 本のものと 6 本のものがある。又、松菊里型の住居跡も存在する。妻棺墓は調査区北東側に密集している。いずれも小兒館で、大型の壺形土



第 8 - III 地点 全景（北から）

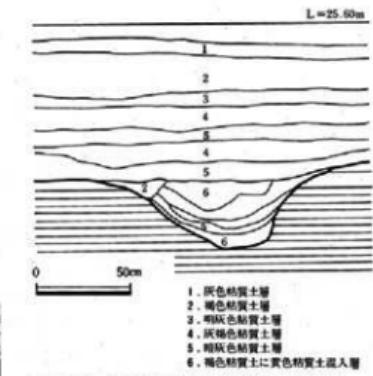


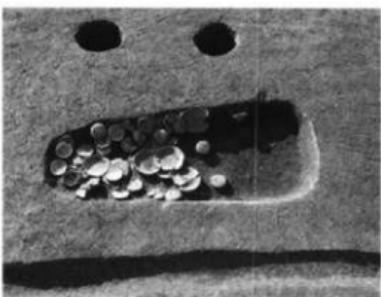
Fig.22 S D 201溝土層図（縮尺 1/30）



第 8 - III 地点 第 1 面全景（南から）



第8-III地点 第1面S X2001木棺墓



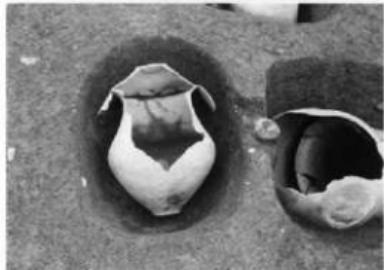
第8-III地点 第1面S X01土壙墓



第8-III地点 第2面全景（南から）



第8-III地点 第2面弥生時代住居跡群（北から）



第8-III地点 弥生時代前期壺棺墓



第8-III地点 弥生時代壺棺墓群（北から）

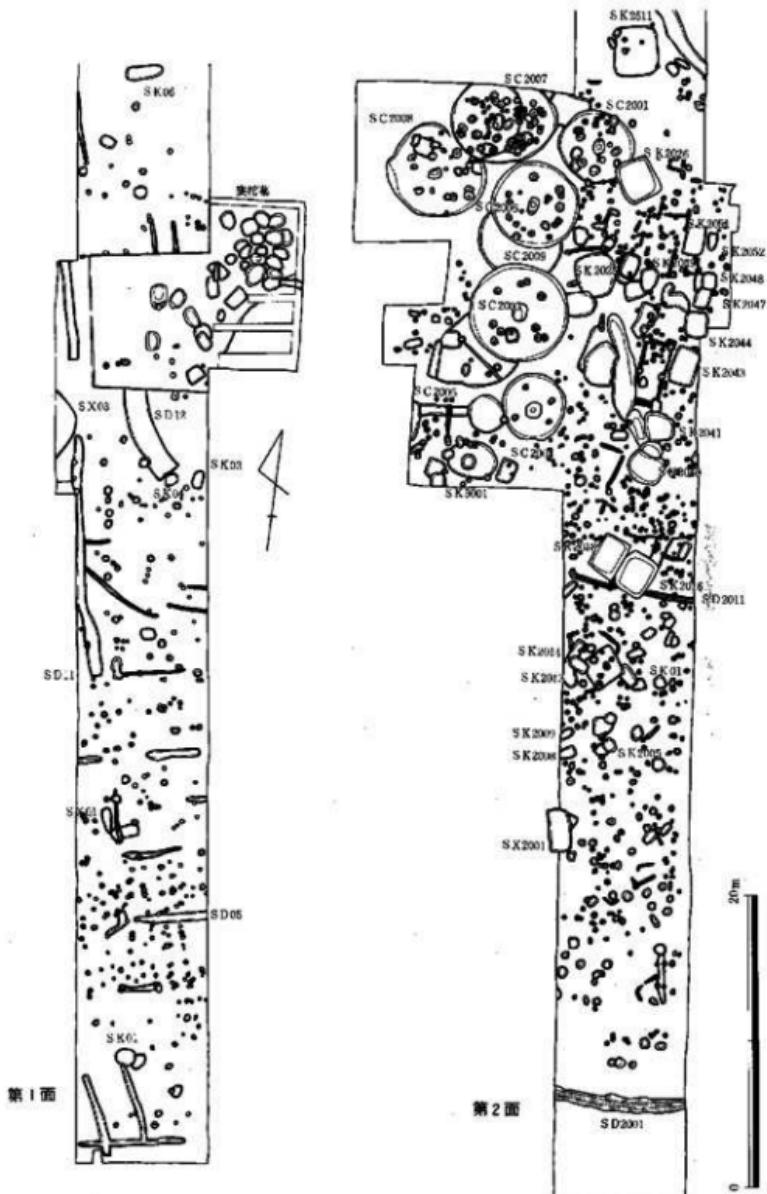


Fig. 23 第H-III地点 第1・2面造構配図 (縮尺 1/400)

器を使用する。棺外に彩文を施した小型壺や小型甕を副葬するものもある。この覆棺墓群は棺の壺形土器の形態や副葬小型壺・甕から板付I式併行期から中期初頭までの幅をもつていることがわかる。貯蔵穴は方形、長方形、円形のプランがあるが、大半は長方形プランである。集落形成の在り方は住居跡、覆棺墓、貯蔵穴を混在せずに配置しており、集落内で空間の使い分けが窮屈である。



第8-N地点 全景（北から）



第8-N地点 S X01方形窓溝状遺構

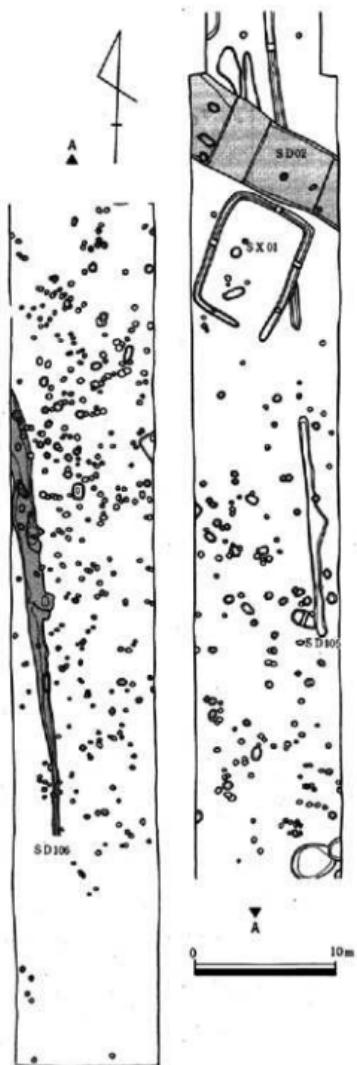


Fig. 24 第8-N地点 第2面遺構配置図（縮尺1/400）

### 第8-IV地点（14号道路B区）

遺構面は2面存在する。第1面は暗灰色粘質土の整地層で、中世の遺構面を形成する。厚さ20cmを測る。第1面の北側に於いては、一部の遺構を検出することが可能であったが、南側では遺構を識別し難いため、第2面まで掘り下げる。第2面の遺構面は黄褐色粘質土で、縄文時代～古墳時代の生活面を形成する。第1面の遺構は里道の方向に沿った地割り溝を数条、河川跡1条、土塙2基などを検出した。この河川跡（SD106）の底面は起伏をもち、流水の跡を示している。埋土は黄灰色砂層で、堅く締まっている。遺物は中国青磁、白磁が出土している。土塙は隅丸長方形を呈している。第2面の遺構は方形周溝状遺構1基、土塙1基、縄文時代河川跡1条、pit群である。方形周溝状遺構S X01は長辺7.2m、短辺4.8mを測り、隅丸長方形を呈する。周溝は幅40～50cm、深さ約20cmを測る。南東の隅が切れている。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は土器の細片にすぎないため時期を明確にし難いが、弥生時代～古墳時代の所産であろう。



第9-I地点 全景（北から）

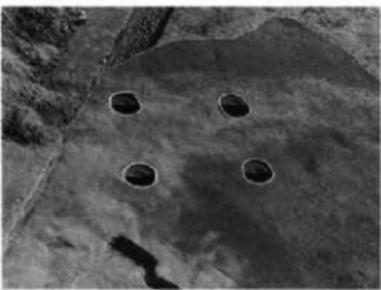


第9-II地点 全景（北から）

### 第9-I・II・IV地点（取付1号道路・12号排水路）

舌状台地の北西に位置しており、遺構面は淡黄色粘質土である。遺構は古墳時代の竪穴住居跡、土塙、掘立柱建物、河川跡を検出した。遺構の遺存状態は悪く、II地点の竪穴住居跡は周

溝のみ遺存していた。I 地点で検出した河川跡（S D10）は幅約10~15mを測り、北東に流路をとる。第8-I 地点のS D10河川跡に接続する河川跡である。出土遺物には5~7世紀代の須恵器、土師器の他、初期須恵器の环もある。I 地点の河川跡北側の掘立柱建物は1間×1間の規模で、梁行2.4m、桁行3.1m、柱穴径約80cmを測る。時期は河川跡に先行すると考えられる。



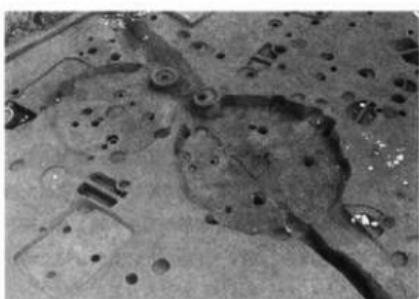
第9-I 地点 S B01掘立柱建物（北から）



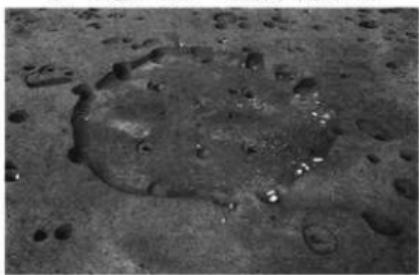
第9-III地点 全景（北から）

### 第9-III地点（取付2号道路・12号排水路）

遺構面は疊混じりの淡黄色粘質土、又は暗褐色粘質土で、しまりがない。遺構は縄文時代晚期の溝1条、埋甕1基、弥生時代前期の竪穴住居跡7軒、構3条、中世の井戸1基などを検出した。



第9-III地点 SC01~03住居跡（北西から）



第9-III地点 SC05住居跡（北から）

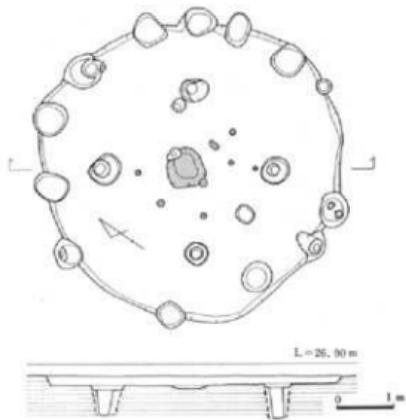


Fig.25 SC05住居跡実測図（縮尺1/100）

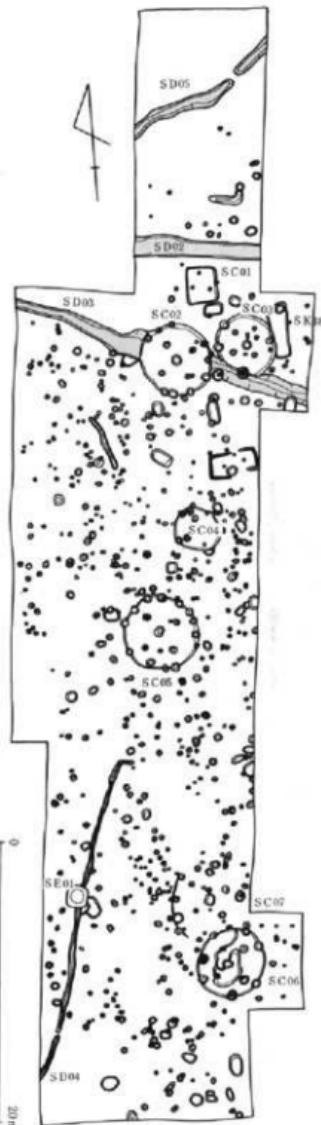


Fig.26 第9-III地点 遺構配置図（縮尺1/400）

縄文時代晩期の溝は断面形がV字形を呈し、東西方向に流れる。幅は1mを測る。弥生時代前期の竪穴住居跡は7軒検出したが、うち1軒は柱穴、炉のみである。平面プランはいずれも円形で、炉の脇に柱穴をもつ松葉型の住居跡も存在する。主柱は4本であるが、壁際にも8~12個の柱穴が巡る。炉には炭、焼土が見られるが、いずれも浅く、しかも強く焼けた痕跡はない。住居跡の規模は最大で直径約6mを測る。出土遺物には板付I式併行窓、壺の他、石庖丁、磨製石斧、打製石瓢などがある。時期は板付I式~II式併行窓の間に考えられる。住居跡群の北側には南西~北東方向のV字溝が存在し、住居跡群を囲繞すると考えられる。遺存状態が悪く、幅1m、深さ45cmを測る。この時期の住居跡群は第8-III地点にも存在する。第8-III地点との間には縄文時代後期以来の谷があり、谷を隔てた微高地に単位集団を形成していたと考えられる。

### 第10-I・II・III地点（18号道路B VII・X I区）

第10-I地点は事業地の西南部に位置し、台地が西側に傾斜してゆく地形である。ここでは調査区の中央に、深さ約90cm、幅12~21mを測る河川跡（SD01）を検出した。この河川跡は第9-I・8-I地点で検出した古墳時代の河川跡（SD01, SD10）に接続するもので、南側は西南方向に蛇行し、三ヶ月湖状の深い谷を形成する。I地点の地山は暗灰褐色砂礫層であるが、II地点の北側からIII地点は黄褐色粘質土が地山を形成する。II地点は東西方向の縄文時代晩期の小河



第10-I地点 全景（東から）



第10-I・II地点 全景（北東から）

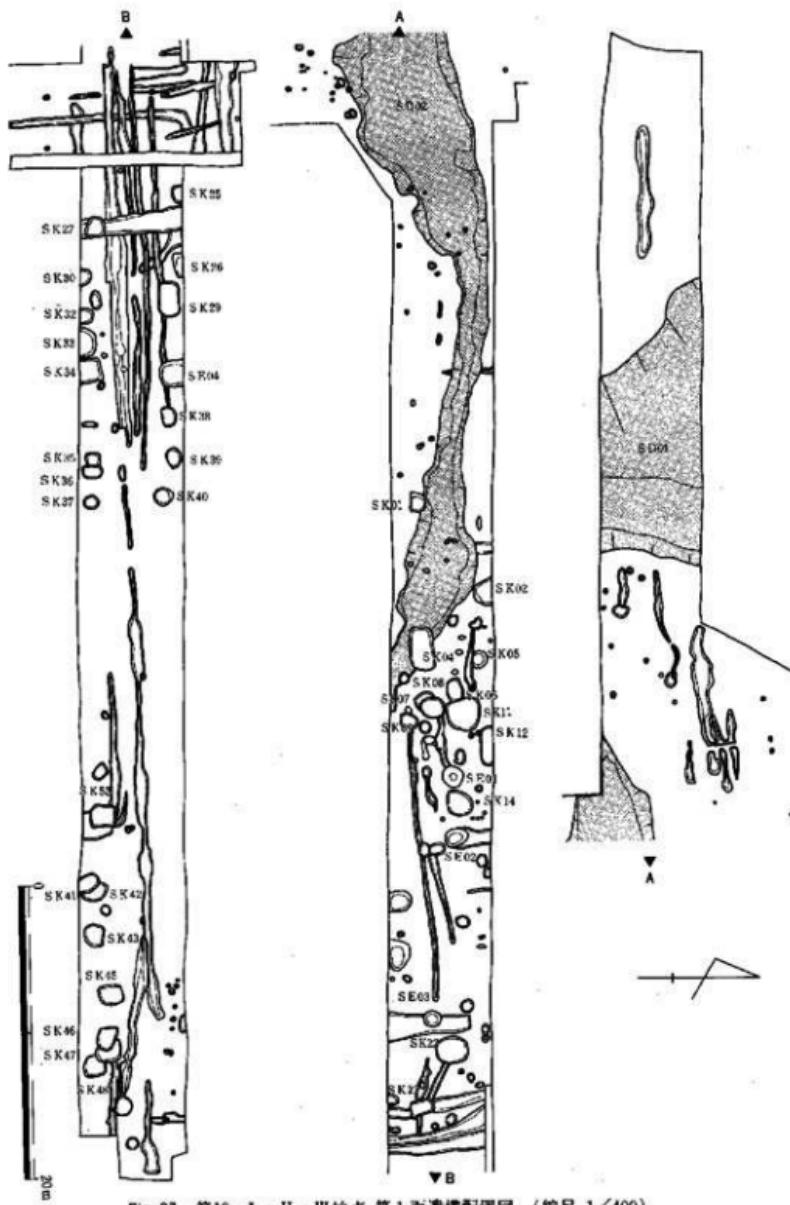


Fig.27 第10-I·II·III地点 第1面遗構配図図 (縮尺 1/400)



第10-II地点 第1面全景（西から）

第10-III地点 第2面全景（西から）

川跡 (S D02) を検出した。川幅は不定で、川底は起伏が大きく、砂礫の堆積がある。幅は2~7m、深さ40~70cmを測る。この河川跡は第8-IV地点の北端から第7-IV地点を通過して、第17-I地点へ至る。

第10-II地点の東側から第10-III地点は黄褐色粘質土の上層に暗灰色粘質土の整地層が形成され、中世の遺構が存在する。この整地層は耕作土の直ぐ下に存在し、厚さ約20cmを測り、第8-IV地点を中心に第7-I地点、第10-IV地点、第19地点、第20地点の約200m四方の広大な地域に亘っている。第10-II・III地点で検出した遺構は溝18条、土塙53基、井戸4基である。溝は細く、幅約20~40cm、深さ15cmを測る。長さは一定しておらず、途中切れ切れになるものも存



第10-I・II地点 S D02河川跡（西から）

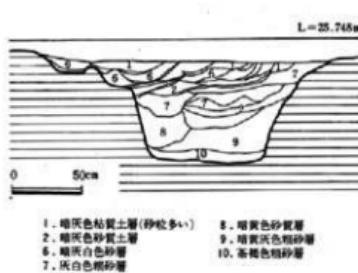
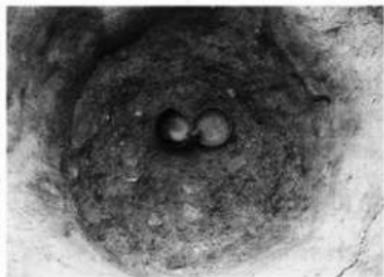


Fig. 28 S D02溝土層図(縮尺 1/40)



第10-II地点 S E02井戸



第10-II地点 S E03井戸



第10-III地点 S E04井戸（南から）

在し、覆土に砂を含むものある。溝の方向はいずれも東西方向であるが、第10-II・III地点の境では南北方向の小溝と切り合う。これらの溝の上部には農道（里道）が存在しており、この農道が条里方向と一致するもで、かつての地割り溝又は、里道側溝とみなすこともできる。土塙は隅丸長方形又は、不整方形を呈しているが、断面形は袋状、台形、鑿鉢形がある。SK29は断面が台形状を呈しており、内部には炭化物が厚く堆積しており、骨片が認められた。井戸は4基の内、素掘りの2基には、底面から領めの祭祀と考えられる瓦器碗や土師器が出土した。井戸S E02は井戸底に円礫を環状に組み合わせているが、元来、内側に曲物を据えていたものと思われる。SE04井戸の井筒は曲物で、遺物には龍泉窯系青磁I類や玉緑白磁碗が出土している。土塙、井戸から出土する遺物は全体に糸切り底の土師器が大半を占め、ヘラ切り底の土師器は少ない。12世紀前半～12世紀後半頃と考えたい。

#### 井戸（S E04）

整地層上面より掘り込まれており、掘り方は隅丸方形を呈し、1辺の長さ140cmを測る。方形

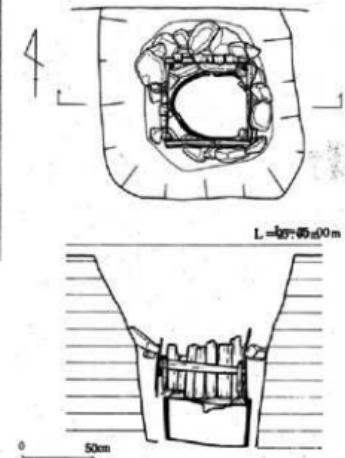


Fig.29 S E04井戸実測図（縮尺1/40）

に板材を組み合わせた井戸枠は1辺約65cmを測る。四隅に木杭を打ち込み、下部から20~25cmのところに、棧を渡して、その外側に幅7~11cm、厚さ約1cmの板材を縦に用いている。樋側には直径約60cmを測る曲物を用いているが、これは三重の入れ子になっている。周囲の掘り方の板材の上部より樋側の上面の間には転石を詰め込み、井戸側を固定している。曲物は崩壊の危険があつたためウレタンで取り上げた。

#### 第10-IV地点（18号道路B III区）

北西方向に延びる台地の東側傾斜面に位置している。金層川は油山山塊より蛇行しながら当該地の東側を洗っている。遺構面は2面存在する。第1面は中世の整地層で、暗灰色粘質土で



第10-IV地点 第1面全景（西から）



第10-IV地点 第2面全景（北から）

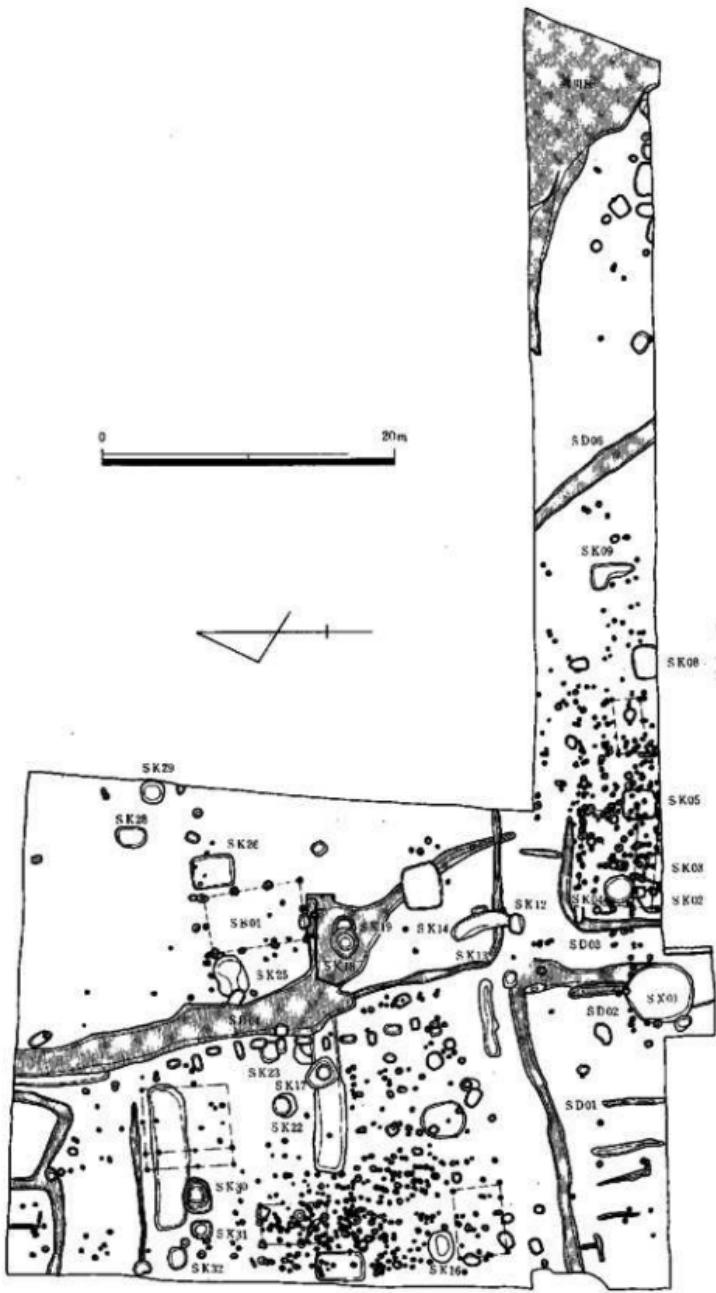


Fig.30 第10-W地点 第1面遺構配置図 (縮尺 1/400)

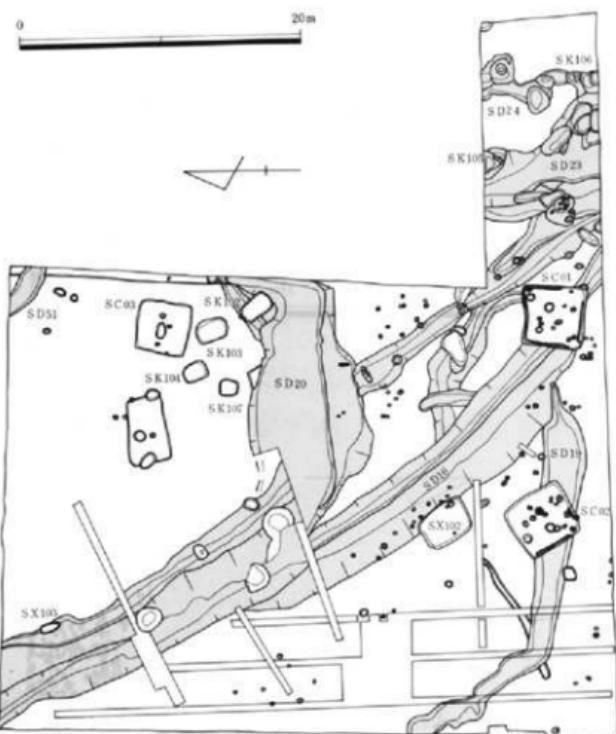
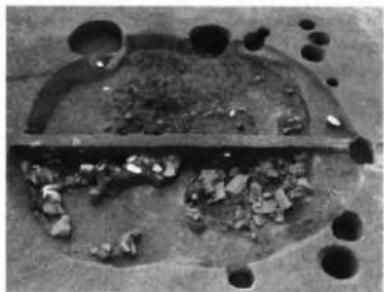
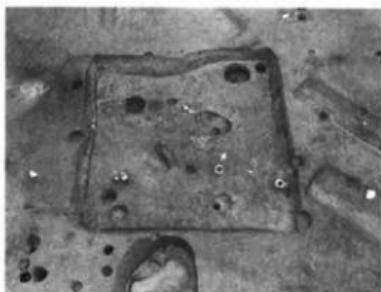


Fig.31 第10-Ⅲ地点 第2面造構配置図 (縮尺 1/400)



製鉄関連構造(西から)



SC01古墳時代住居跡(西から)

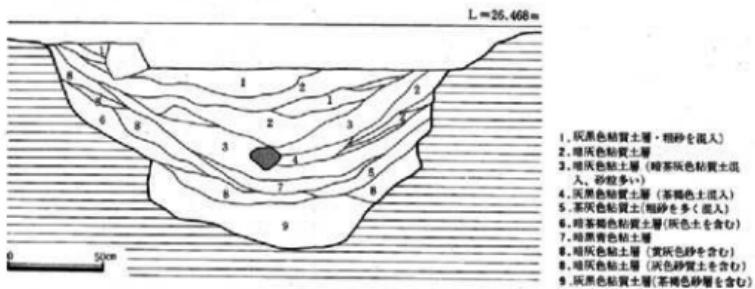


Fig. 32 SK17 土壌(井戸)土層図(縮尺 1/30)

ある。12~13世紀代の遺構が主で、製鉄遺構1、掘立柱建物9棟、溝状遺構9条、河川跡1条、土塙墓1基、土塙37基、井戸7基がある。井戸は全て素掘りである。掘立柱建物の内、S B01、S B02建物は矩形の小溝 S D03、S D04に各々囲まれている。建物はいずれも2間×3間で、S B01は南側に扉がある。製鉄遺構は長径4.5m、短径3.7mを測り、平面形は椿円形、断面形は逆梯形を呈している。床面は炭化物が堆積しており、多量の炉壁のブロックと鉄滓、輪羽口が出土した。第2面は黄褐色のシルト質の地山で、遺構は縄文時代の河川跡2条、住居跡1軒、貯蔵穴6基、土塙3基、弥生時代溝2条、古墳時代住居跡2軒、土塙1基、掘

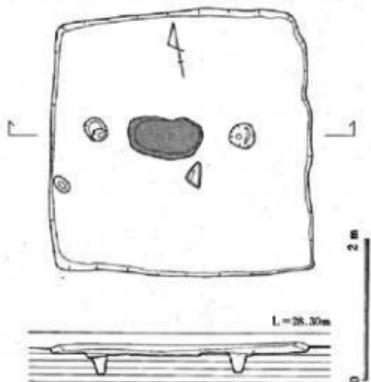
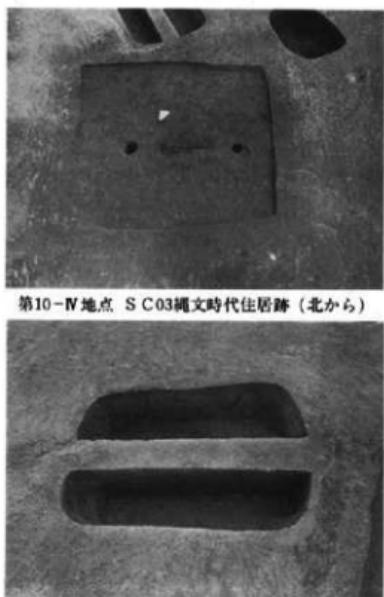


Fig. 33 S C03 縄文時代住居跡実測図(縮尺 1/80)



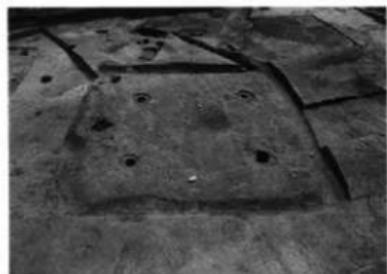
立柱建物 1 棟がある。古墳時代の住居跡は 1 辺が 4 ~ 5 m の方形を呈している。SC02 住居跡の主柱は 2 本である。建物は 2 間 × 2 間の純柱建物である。弥生時代の溝はいずれも断面形が逆梯形を呈しており、時期は中期中頃である。SD16 は最大幅 5 m を測る。縄文時代の河川跡は、幅・深さ共に一定していない。2 条の河川跡 (SD19, SD23) の上流が同一方向をとっているので、同一河川の分流と做すことができる。貯蔵穴は平面形が隅丸長方形を呈し、断面形はわずかに袋状を呈している。住居跡は一辺約 3.6 m の方形を呈し、中央に炉、その東・西に主柱 2 本を設けている。上記の遺構はいずれも晩期に属するものと考えられるが、土壙 SX103 は突帯文系の土器が一括して出土している。

### 第11地点（支線13-2号用水路）

第16地点で検出した旧河川跡の南側に位置し、遺構面は黄褐色粘質土、もしくは黄灰色シリト質で、雨に非常に脆弱である。調査区は「土生造園」の周囲を鉤形に巡っている。遺構は古墳時代の住居跡 5 軒、溝 5 条である。住居跡 1 軒と溝 1 条は布留式併行期、他の住居跡 4 軒は 5 世紀代である。この 4 軒は構造が近似しており、規模は 1 辺が 4 m ~ 5 m が平均で、1 軒のみ 7



第11地点 住居跡群全景（東南から）



第11地点 SC05玉作り工房跡（北から）

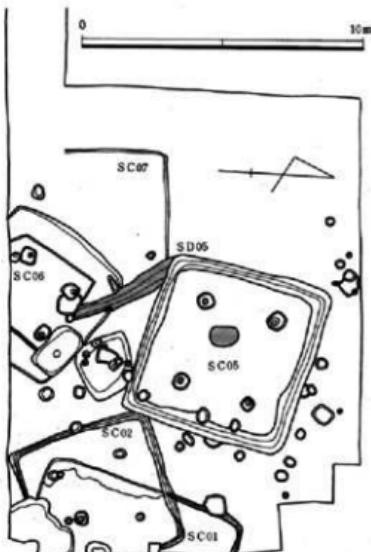


Fig.34 第11地点 遺構配置図（縮尺 1/200）

mの規模をもつ。布留式土器併行期の溝は著しい削平を受けているが、甕の完形品を含め、土器を多量に出土した。

#### 工房跡

上記の住居跡の内、5世紀の中頃～後半と考えられる住居跡からは滑石の原材やチップを出土しており、又、柱穴の位置や特殊なpitの存在から工房と考えられる。特に5号住居跡は1辺約6mの方形を呈し、支柱は4本柱である。炉は西寄りに位置し、楕円形で浅い。東辺の中央に接して、直径50cmのpitがあるが、これは工作用の水を湛える作業穴と考えられる。床面は滑石の粉末とチップが堆積し、埋土はこの層のため簡単に分離する。滑石の原材は長さ5cm～15cm大まで存在し、出土した小玉、未成品は数百点に及ぶ。その他、模造品や白玉等もある。SC06住居跡も同様な構造を示している。

### 第12地点（26-1号用水路）

用水路予定地のためトレンチ調査となった。第8-I地点と第14地点を東西に隔ぐ方向で、長さ51m、幅1.6mの調査区である。遺構は第8-I地点検出のSD11河川跡とSD10河川跡の延長部分を検出した。第12地点SD01、第7-I地点SD01は共に埋没は中世と考えられる。

### 第13地点（26-2号用水路）

この調査区は道路予定地の第8-I地点から西側へ伸びる水路予定地である。長さ70m、幅3mの調査区である。第8-I地点で検出した古墳時代の河川跡（SD10）内に重複している。調査区の西端部にて河川の岸を検出した。この周辺には土器が散布しており、河川跡内からは土師器甕、高环などがぎっしり詰った



第13地点 土器溜り（東から）

土器溜りを発見することができた。いずれも布留式土器併行期の土器である。

### 第14地点（25号用水路）

当該地は第9-III地点の西にあって、同一の遺構面を形成する。ただし、遺構面の下層では縄文後期の深鉢が出土した。遺構は中世の溝、土壠、敷石遺構などがある。ここでは第9-III地点検出の弥生時代の集落の広がりを予想したが、関連遺構は検出し得なかった。

### 第15地点（13-1号排水路・27-2号用水路）

第6地点と同一台地上にある。試掘調査の結果も同様である。調査区の幅は、西側のI地点が3m、東側のII地点が2mで、合計の長さは125mである。西側約5mでは旧河川跡の岸を検

出した。この河川跡は第6-I地点の中世遺物を上層から出土する河川跡(S D01)に接続するものであろう。台地上では柱穴、土壙や小溝を検出した。

### 第16地点(63-9・10田面)

調査区の西側と東側に旧河川跡が流下しており、遺跡は中洲状の低位段丘上に立地している。この台地は北東から南西方向を向いており、長さ約90m、幅46mを測る。遺跡の標高は約25mを測る。東側の河川跡は北東方向に流下しているが、北側ではこの河川跡は第7-I地点で検出した河川跡(S D01)に合流する。南側ではB-IV-3・4トレンチ調査での結果、浅い谷状を形成することが判明している。B-IV-3・4トレンチでは下層より弥生中期の土器を多量に出土したが、第7-I・8-I地点などでは上層から中世遺物を出土している。又、第16地点では旧河川跡の上層の堆積土が方形周溝墓などを覆っており、東側の旧河川跡の終末が中世にあることを示している。西側の旧河川跡は、第8-I・9-I・13地点の調査によって4世紀～6世紀後半までの遺物が出土しているが、流れの方向からみれば東側の河川跡と合流もしくは切合うものとみられる。いずれにしても、遺構はこの中洲状の狭長な台地に限られている。遺構面は黒色砂質土、もしくは暗黄色粘質土の堆積土である。遺構は弥生時代前期貯蔵穴(板付I-II)3～6基、前期住居跡4軒、前期～中期初頭の竪棺墓38基、祭祀遺構1、古墳時代前期の住居跡12軒、同じく、方形周溝墓28基、小型竪穴式石室1基、土塙墓、石棺墓、竪棺墓1基、後期の石蓋土塙墓2基、平安時代の池状遺構1、掘立柱建物などを検出した。方形周溝墓は台地の中軸に沿って北東から南北



第16地点 全景(南から)

に連なっている。一边の長さ5~7mを測り、主体部は石棺墓、木棺墓、石蓋上塗墓、土塗墓がある。主体部の主軸方向で三つのグループに分けられ、時期差を示すものと考えられる。周溝を共有するものが多く、複数の主体部を持つ周溝墓は少なく、4基である。中心的なSX1007周溝墓は南北7m×東西8mの隅丸方形形状を呈し、他の周溝墓に比べて周溝の規模も大きく、幅約150cm、深さ約60cmを測る。又、幅2.6mの陸擣部を北東側に設けている。溝内の4ヶ所から祭祀と考えられる丹塗り長颈壺が出土した。

弥生時代の遺構は裴棺を除いて完掘したものは少ない。裴棺は前期~中期初頭の時期で、

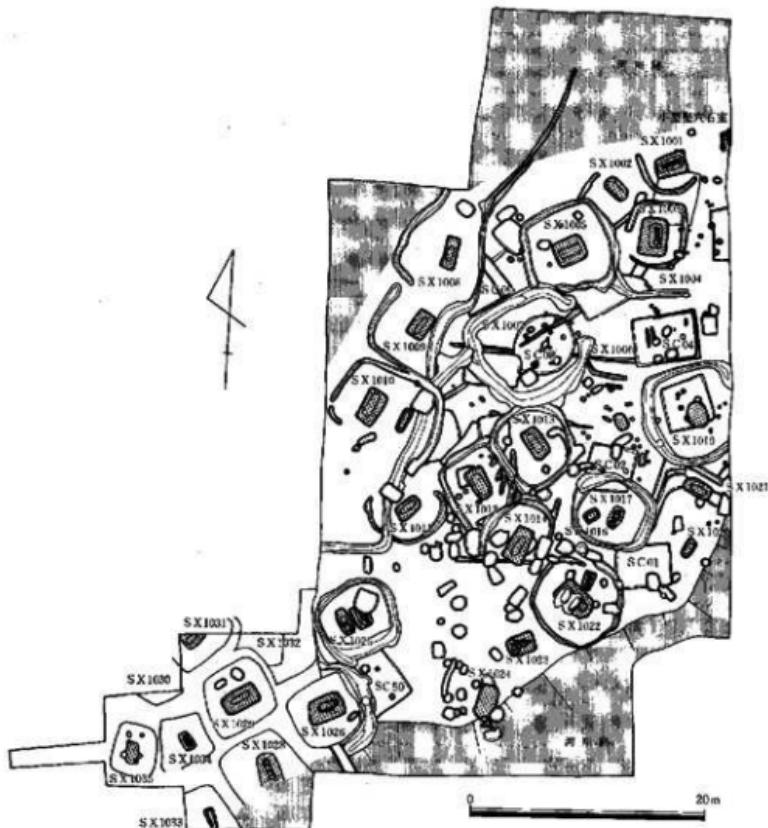
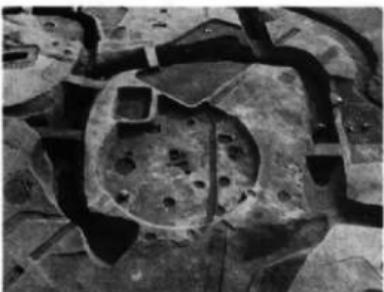


Fig. 35 第16地点遺構配置図 (縮尺 1/500)



第16地点 方形周溝墓群（南から）



S C08住居跡・S X1007方形周溝墓



S X1026～1034方形周溝墓（西から）

金海式寝棺を含んでいる。住居跡は1軒を除き未掘であるが、寝棺墓の時期に相当するものと考えられる。平安時代の造構は径7mを測る大型の土壙で、断面形は擂鉢状を呈している。遺物は須恵器、土師器の高环、甕、壺、器台などが出土している。



S X 1017方形周溝墓主体部



S X 1003方形周溝墓主体部



小型竪穴式石室の状態（東から）



小型竪穴式石室の祭祀土器群

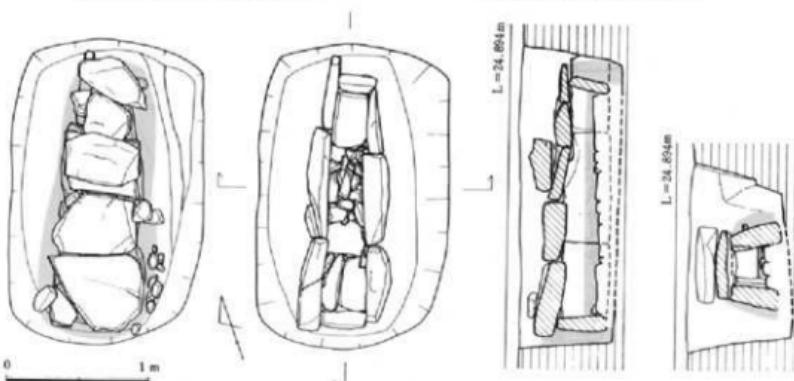


Fig. 36 S X 1017方形周溝墓主体部実測図 (縮尺 1/40)

### 第17地点 (65-1田面)

遺構面は北側が黄褐色粘質土で、南側が整地層の暗灰色粘質土である。南東側に旧河川跡が蛇行しており、この上面に整地層が形成される。主な遺構は中世の地割り溝の他、井戸状の土壙が5基、土壙3基、縄文時代の小河川跡又は、溝状遺構が2条である。井戸状の土壙はいずれも不定形を呈し、断面形も一定していない。覆土は暗灰色粘質土に褐色土を含んでいる。湧水が著しく、溜水としての利用も考えられる。縄文時代の河川跡SD01は第7-IV地点で検出したSD04河川跡に接続する。

### 第18地点 (62-1田面)



第17地点 全景（南から）

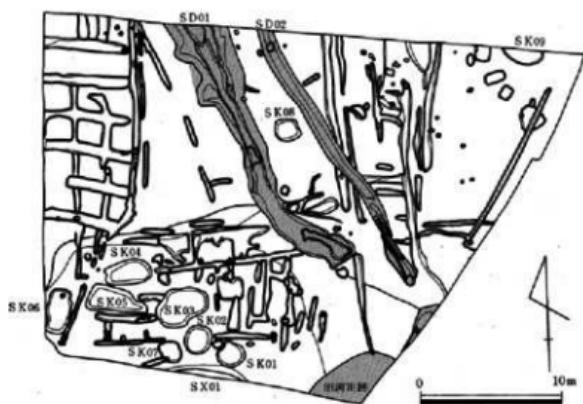


Fig.37 第17地点 遺構配置図 (縮尺 1/400)

遺構面は黄褐色粘質土の堆積土で、粗砂を含む。中世に削平を受けており、遺構は pit 群が主体である。その他は中世の溝状遺構 17 条、井戸状遺構 5 基、平安時代の溝状遺構 2 条がある。中世の溝状遺構は幅 30~80cm を測り、南北方向に直線的に走り、里道に平行している。覆土は暗灰色粘質土で、土師皿が出土した。井戸状遺構は平面形が梢円形を呈している。第 17 地点でも同様な井戸状遺構を検出している。



第 18 地点 全景（東から）

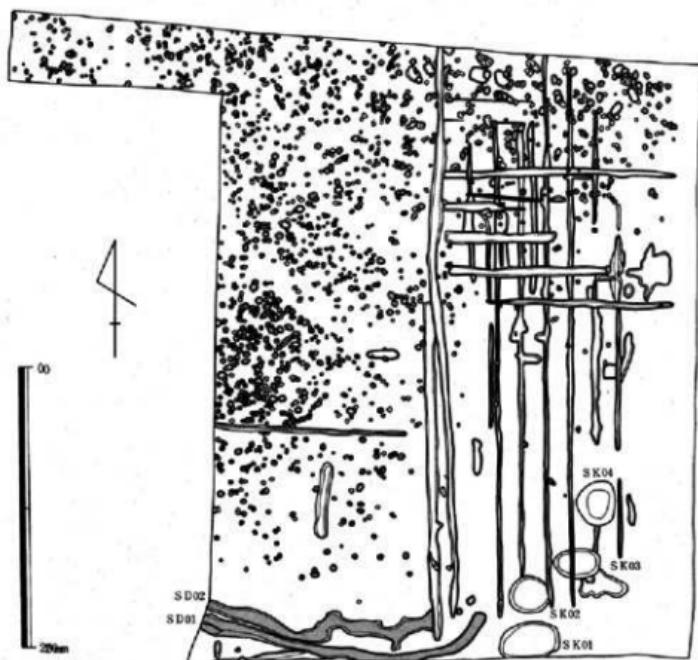


Fig. 38 第 18 地点 遺構配図（縮尺 1/400）

### 第19地点 (59-1出面)

第20地点の南側約20mに位置し、遺構面は2面存在する。第2面は時間的な制約から調査の対象外とした。第1面は暗灰色粘質土で、厚さ約15cmの整地層である。遺構の覆土は遺構面の暗灰色粘質土と同色・同質を呈し、極めて検出し難い。遺構は掘立柱建物2棟、塀1条、溝4条、土壙4基、池状遺構1基である。

掘立柱建物は2間×3間が1棟(SB01)、南側に庇付きの梁行2間の建物1棟(SB02)である。いずれも南北棟で、磁北方向である。SB01は純柱建物で、桁行の柱間に間柱を有している。SB02建物の規模は2間×3間の可能性が高い。梁行4mを測り、柱間は梁間2m、桁間3mである。この建物周囲には扇状に柱が巡っている。2棟の建物の間には東西方向のSD01溝がある。SB02建物と溝SD01の間には、目隠し状の柵がある。溝SD01は南北方向の溝SD03と直交する位置にある。遺物には中国陶磁器等の出土がある。

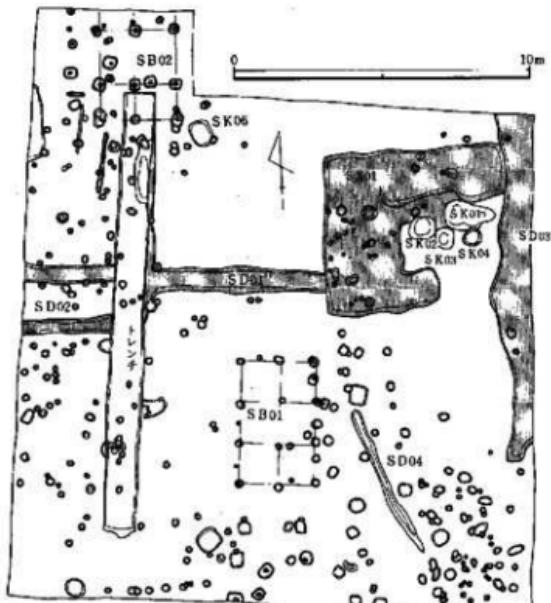


Fig. 39 第19地点遺構配置図 (縮尺 1/200)



第19地点 全景（東から）

### 第20地点（59-2田面）

第8-IV地点の西に接しており、沖積地上に位置する。遺構面は2面存在し、上面は暗灰色粘質土層で、中世遺構を中心としている。下層は黄灰色粘質土で、弥生～古墳時代の面を形成する。

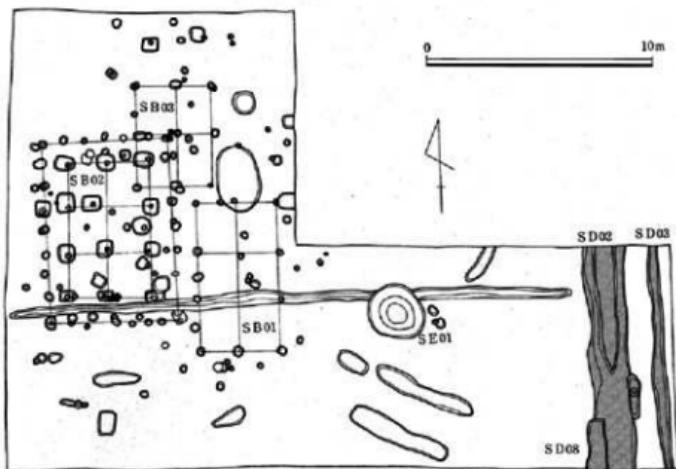


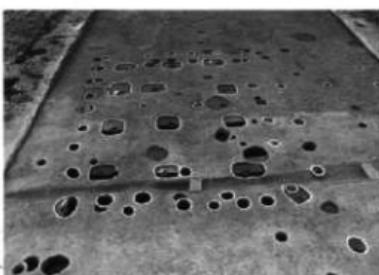
Fig. 40 第20地点 遺構配置図 (縮尺 1/250)

第2面の調査は圃場整備の工期の都合上、将来に委ねた。第1面に於いては、調査地区の北西部にて掘立柱建物の一部を検出したため、北側を拡張して規模を確認した。遺構は溝状遺構3条、井戸1基、掘立柱建物4棟である。掘立柱建物の大部分は地区外にて検出した。井戸は直径2.7mを測り、中央に井筒の痕跡を残している。井戸底から瓦器碗2点出土した。掘立柱建物はいずれも磁北方向の南北棟である。

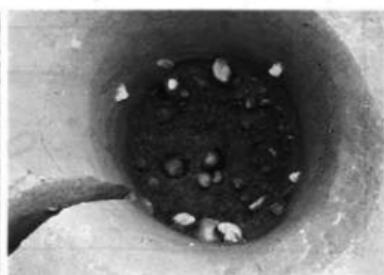
2間×3間が1棟、2間×2間が1棟、  
 2間×3間に4面庇付きが1棟。その他  
 1棟である。2間×3間の建物は梁行約  
 4m、桁行約6mの規模で、掘方径は約  
 80cm、柱根径約20cmを測る。この建物の  
 四面には約1m間隔の柱列が配置され、  
 その規模は約6m×約8.4mを測り、柱間  
 と北側梁行に東柱がある。柱が小さく不  
 捕いであることから庇とは考え難く、四  
 面に繻縁状の構造をもつものであろうか。  
 調査区の東端部には南北の溝であるSD  
 02・03がある。これらからは中世の遺物  
 を出土するが、この上層には現在の里道  
 が存在しており、条里の界線をなすもの  
 と考えたい。又、この溝は建物群と方向  
 を一致させており、中世集落の東側の界  
 線をも形成している。第10・19地点と時  
 期が一致しており、特に第19地点とは同  
 一方向の建物群を構成している。



第20地点 全景(東から)



S B02掘立柱建物(南から)



S E01井戸(南東から)

いる  
入 部 I

福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集

---

1990年（平成2年）3月31日 発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 博巧印刷機

---